

俗語考下

橘守部撰

はノ部

○ばあ、べえ、かくれんばう 罷兒を
弄調の戯れに、己身をしばし隠して後、貌を出して
「ばあ」といふは、否む時に「べえ」といふと通音
にて、もとからかふ詞也。これを又轉用して、あへ
しらふ詞にも遣ふ事あり。詞の活用は雅俗ともによ
く似たるものなり。西土にも是に似たる事あり。字
書門字の註に臥和^{ラウハフ}、咸切^{カムツチ}。音獲^{ハツク}。隱身忽出驚人之

○ばあとわらふ 古今著聞集、卷十七、怪異部
ばけ物に兒をとられたる事をいへる條に「門をこと
ぐしくたゞくものあり云々。うしなへる子とらせ
ん、あけよといふ。猶おそろしくてあけず。さるは
どに家の軒にあまた聲してばあとわらひて云々」と

あり。初言を濁るは何言ぞの約る歟。又は、と笑ふ
をかく讃れる歟。

○俳諧 通雅、釋語「猶曼清之口諧。少孺之談笑
也。揚詩品云。云々。杜公謂之俳諧體。唐人有張打
油。北夢瑣言有胡釘鉗詩」遺契、十一、俳諧「左氏傳。
陳氏鮑氏之圉人爲優。柱注曰。優俳。正義曰。優者
戲名也。史游急就篇云。倡優俳笑。是優俳一物而二
名也。今散樂戲。爲可笑之語。而令人之笑是也。

○はいすみ 今、はいすみといふもの、灰墨の
意とおもふやうなれど、掃墨^{ハキスミ}の音便也。和名抄に「掃
墨。功程式云。掃墨一斗。合酒二升。膠二両。和名
波伊須美」

○帯星^{ハタキホシ} 和名鈔云「兼名苑云。彗星。其形如
帶^{ハタケ}也。音逐^{スル}又音歲。和名八々木保之」

○はうし 拍子 異本拾玉集「庭のおものほし
をとなふる風の音にき、あはせてもとる拍子かな」
○庖丁^{ハサミ} 「かうべ」を見よ。

○忘八 淫房を忘八と云は、人をして孝悌忠信
禮義廉恥の八を忘れて、遊樂に走淫^{スル}ゆゑに云といへ
り。されど其字古き物には見えず。清朝となりて云

出せし事なり。

○はうむる　葬をはうむるといふは、もとは、
るといひしが、音便に頬れたる也。但し八日をやう
か、賜をたうぶなどいへば、大かた音便の常にて、
は死人を送遣事なるを、今はうむるといひし
營み祭る名の如くなれるは轉じたる也。
○はうる　物を棄るをほうる、又はうり棄ると
も、又はうり投るなどもいへり。こは散しやる意に
て、屠も葬も溢も、本は皆同語なり。古事記上巻に
「切散其蛇」中巻、櫛原宮段に、兄宇迦斯が事を
「控出斬散」此等の散を波布理と訓て、波布流ハ
散すを云。屠の意即此中にこもれり。萬葉十三に「つ
るぎたち磨し心を天雲に念散之云々」とよみたる
も散しやるよし也。又流離るを流布流と云も、鎮居
る者の散亂る、意にて本同意。葬を云も野山へはふ
らしやる也。水の溢も同じ。常に、「はふらし」「あ
ふらし」をよく相かよはして用るも用語なる故也。
又云、物を棄るを投り棄るといひ、空しくかへるを
あふれて來たなどいふは、「はぶれ」「あぶれ」「葬

葬をはうむるといふは、もとは、
言の上はひが事にもあらねど、古くはぶるといひし
は死人を送遣事なるを、今はうむるといひし
營み祭る名の如くなれるは轉じたる也。
○はうる　物を棄るをほうる、又はうり棄ると
も、又はうり投るなどもいへり。こは散しやる意に
て、屠も葬も溢も、本は皆同語なり。古事記上巻に
「切散其蛇」中巻、櫛原宮段に、兄宇迦斯が事を
「控出斬散」此等の散を波布理と訓て、波布流ハ
散すを云。屠の意即此中にこもれり。萬葉十三に「つ
るぎたち磨し心を天雲に念散之云々」とよみたる
も散しやるよし也。又流離るを流布流と云も、鎮居
る者の散亂る、意にて本同意。葬を云も野山へはふ
らしやる也。水の溢も同じ。常に、「はふらし」「あ
ふらし」をよく相かよはして用るも用語なる故也。
又云、物を棄るを投り棄るといひ、空しくかへるを
あふれて來たなどいふは、「はぶれ」「あぶれ」「葬

る」「投る」等のもと同語にして、いひざまの訛れる
もの也。古事記傳廿九丁に云「葬は波夫埋と訓べ
し。御屍を送奉る儀を云なり。遠飛鳥宮段歌に「意
富岐美袁斯麻爾波夫良婆續紀卅一の詔に「彌麻之
大臣之家内子等平母決布理不賜慈賜波牟云々」な
どある波夫流と本同言にて、放るなり。今俗言に物
を擲るを富袁流と云も、波夫流の音便に頬れたるな
り。又溢とも互に通へり。萬葉十四に「久爾波布利
福爾多都久毛乎」とあるも放さずなり。又物語書などにも、は
と云り。十九に「食國之四方之人乎母安夫左波受惑
賜者」とあるも放さずなり。又物語書などにも、は
ふらかすともあふらかすとも通はしいへり。されば
葬も住なれたる家より出して、野山へ送りやは、
放かし遣る意より云へり」とあり。葬の歌萬葉二十三
丁五、また十三二十等にあり。見合すべし。

○羽織　武德安民記十七慶長十年八月伊勢安濃
津戰。二手の種田助之丞は、墨塗紺糸の鎧に、白地
に朱にて藤丸書たる木綿羽織を着し、上に繩帶をし
て、大半月の立物を輝かし、八十餘の兵を率ひ云々

(次の條参照)

○羽織　合羽　桐油　附帶刀　佗山石、
初編乾「或國守より、鶴壁表と云はいかに製するか
と、問せらるゝ事のありしに、こは鶴の腋毛を集めて
糸もてぬき、今の蓑の如くし、襟をつけ、鉤紐など
を施せり。これ古人唐に倣ひて、こゝにも月卿雲客
雨中參内には、束帶の上にかけて、蓑代衣とせし事
有。されどもたやすからず、貴人ならでは收めがた
がれば、これに倣ひて、其鳥の柔毛を織交、大かた
の雨具とはなせしなり。故に其名を羽織と呼びき。
これ今之羽織の名の濫觴なり。然れば羽織といふは
織地の名にして、裁制の名にはあらず。さて其羽織
も、下賤卑夫の雨具には用ひ難きによりて、紙を合
せて雨具の制をなし、羽織の代りに、桐の油を引き
て、下賤の者の雨具とし、合羽と呼び、又桐油とも
いひつれば、今に至て猶其名存せり。かゝれば、桐
油と云も、又合羽と云も、羽織と云も、鶴壁といふ
も、皆同一にして、其用は雨具なれば、たゞ途中の
服なり。今も茶家者流にては、點茶の人は必ず羽織
を脱禮あり。是をみれば、さすがに二三百年前の古
儀の遺れるに似たり。然るに民間にては、いつとな

く袴羽織と唱へて、禮服の如く成來つることあさま
しけれ。これ則帶とさひろげの風俗と云べし。或人

云、今の羽織の時行はじめは、江戸より起れり。其
土地、平日土沙塵埃はげしき故に、途路往來の間に
禮服の上に打被りて、門前に至りてこれを脱し事な
り。それも脱て持たすべき下僕もめしつれざる人の
やむ事を得ずして、被ながら家に入たるが、風俗に
なりたるなり。これやがて、今の士類の軍器と、小
刀と両刀を佩て、平日往來するが如し。元來佩る所
は小刀にして、太刀は鞘卷にても、野太刀にても、
太刀持に持たすること古風なりつるに、戦國の後の
風俗にて、兵器歸さず、持たすべき下僕もなきやせ
士の、自ら軍器を腰にせし戦国の風移りきて、僕
従衆多つれたる人も、同じく自身に両刀を腰にして
往來する事となりて、両刀は士類以上、一刀ハ卑夫
このわからちにて、士庶人の分階するやうにさへなり
來ぬ。これ羽織來て人の家に入ると同日の談なるべ
し。(雨衣の條参照)

○はかくはかゆかぬ　刈婆加　幾刈

多し。三越、奥羽、北邊の國にて、田産を數ふるに幾刈といふ。富民の產を云に、幾千刈、何萬刈と稱す。その字は定かに知たるものなし。先年越後北鄙の老農奴に問ふ。云く、田四百坪を一反と云。是を百刈として、男壹人にて五百刈宛に作らしむ田五百反也。是にて幾刈と云。

刈より穀二石三石を得上田にてと。是にて幾刈と云る事しられたり」とあり。今案に、萬葉集に「刈婆加」とよみたるも是にて知れたり。婆加は分量の義にて、其日一人して刈量を云也。今右の數を以ていはレ一日の刈量は四十坪にあたる也。萬葉、四十七「秋田之穗田乃刈婆加」十六「草刈婆可爾鶴之立毛」十「秋田吾刈婆可能過去者」

○はがため齒固 源氏初子「はがためのいはひして、もちひ、かゝみをさへとりよせて」土佐日記「正月元日、いも、あらめも、はがためもなし。かうやうのものも、なきくになり。もとめしもおかず」

猪熊關白家實公記「正治三年正月口日。天晴。早旦著直衣見鏡」とあるは、今俗の鏡餅に居る事にて歯固の祝なり。夫木抄に「千代までもかげをならべて逢みんといはふ鏡のもちひざらめや」

○はかま 空穂、俊蔭、下「むげにさえざらんもわからくしければ、このこけのすのもとによりて」落窓物語、一之下「あなわかくしの晝寐や云々」

○はかま 穿袴 拾遺集、雜賀「冷泉院の五六のみこは、かまざ侍ける頃」同、同「天曆御時、内裏にて爲平のみこは、かまざ侍けるに」後拾遺集、賀

「人のをさなきはらくの子どもにもさせ、かうぶりせさせ、はかまさせなどし侍けるに、かはらけとりて」榮花、淺鏡「大將殿の姫君は五小姫君は三にならせ給ひにければ、御はかまさせたてまつり給ふ」

濱松中納言物語、二「姫君三になり給ひければ、御はかまぎに」

○はかゆかぬ 「はかゆく」を見よ。

○はからる 「はかゆく」 藤原元真集「さだめなくまねくをばなの花す、きほにいづる秋ははからる、哉」

○はかゆかぬ 「はかゆく」見よ。

○はからる 「はかゆく」 藤原元真集「さだめなくまねくをばなの花す、きほにいづる秋ははからる、哉」

○はかり 秤也。計より出たる名也。菅家萬葉上に「かけつれば千々のこがねも數しりぬなどわが戀の逢ふばかりなき」後撰集、秋下に「あかゝらば見るべきものをかりがねのいづこはかりに鳴てゆくらん」これら秤を以てしたてたり。

○はかる 欲く也。後撰集、秋中「白玉の秋の木の葉にやどるとみゆるは露のはかるなりけり」後拾遺集「よをこめて鳥のそらねははかるとも世にあふさかの闇はゆるさじ」

○掃清 萬葉、二十九「掃清め仕奉りて」

○はぎとる 空穂、祭使、廿六「給はりたまふつかさは、ぬす人のみつとひて人のきぬをはぎとりいひさけをさがしはむ云々」

○はく 執忠見集十一「御前のさくらよませ給しに「朝ごとに、さけん庭を櫻花けふより後はちりながらみん」

○ばくち 博奕 ちかや岬五「博奕は上古よりの禁也。續日本紀文武天皇元年丁酉七月文曰。禁博戲遊手之徒。其居停主人亦與居同罪云々」

七月廿八日文曰。今日内舍人大野夏貞配流。又捕博戲

○はぐろめ 枕冊子、廿段、心ゆくもの「はぐろ」

○はぐろめ 博奕 ちかや岬五「博奕は上古よりの禁也。續日本紀文武天皇元年丁酉七月文曰。禁博戲遊手之徒。其居停主人亦與居同罪云々」

七月廿八日文曰。今日内舍人大野夏貞配流。又捕博戲

之輩云云。双六博蒲を博戯として罪に行はるゝ事、捕亡令雜律、及天平勝寶六年の官符に見えたり。角子を用るは凡て双六に屬する故に、延喜彈正式に云双六者不論高下一切禁断せよと云云。僧尼令を見れば、僧尼作音樂及博戯者。百日苦使。碁琴不在制限。と載られたり。碁はそのかみ博奕に入すと見ゆ。空穂、藤原の君、十八「おんみやうじ、かんなき、はくち京わらべ、おうな、おきなめしめつめ」同、藤原の君廿二「又此すぐろくのぬしたちさばかりいますらん。はくちどものいはく、有まじきこといふくそたちがな」

○博奕禁制 持統紀「三年十二月己酉朔丙辰、禁断雙六」續紀、文武天皇元年丁酉七月文曰「禁博戯遊手之徒。其居停主人亦與居同罪云々」後紀、一、延暦五年七月廿八日文曰「今日内舍人大野夏貞配流。又捕博戯之輩云々」延喜彈正式云「雙六者不論高下。一切禁斷」此外捕亡令、雜律、及僧尼令、及天平勝寶六年官符等にも出。

○はぐろめ 「ちよばいち」を見よ。

○はぐろめ 枕冊子、廿段、心ゆくもの「はぐろ」

めのよくつきたる」堤中納言物語、むしめぐる姫君「はぐろつけねばいとよづかす」源氏、末つむ花「古代のをば君の御なごりにて、はぐろめもまだしかりけるを、引つくろはせ給へれば、眉のけざやかになりたるもうぐうしうきよら也」

○羽けぶり立る 藤原爲忠朝臣集「田づらにぞ羽けぶり立るむら雀はなみかたよす風にまかせて」

○はげむ 麗 宇つ保としが「ひとりりいてとまりぬるとはみえたてまつらじとはげみ給へど」

夫木抄十三、秋、西行上人「秋たつとおもふにそらもたゝならでわれて光をはげむ三日月」

○はげる 元 おちくほ物語一之下「古めきまとひて、處々元たるを、是くろけれど漆つきないと清し云云」

○ばけをあらはして 宇治拾遺、八十八「つひにはけをあらはして」

○はこ 箱 笠 物の器をこゝにても古といへり。口子、入子、荒籠などの如し。笠も蓋子の義也。拾遺集、雜、賀「京の家に枕箱をとりに遣したうければ、書付て待ける。則忠朝臣女「いきたる

と清し云云」

○はくまれぬる 金葉集、雜部上、天台座主仁覺「あれまんとおもふ心はひろけれどはぐくむ袖のせばくもあるかな」

○はこのこ 「つまり」を見よ。

○箱の蓋なるものを引よするやうに 空穂、後蔭下「たゞめのまへなれば、われも人も、はこのふたなるものをひきよするやうにて、わづらひなくて云々」

○はこびいづる 夫木抄、二、春、源仲正「うぐひすのねぐらによるはをさめたるこそ朝なくはこびいづ也」

○はこびつくる 夫木抄、卅二、雜、元輔「くりもとやせたのはしげたたわむまではこびつくるみつぎものかな」

○はこべ 蕁妻 蕁妻を、今は、こべと云は、はくべらを省き云也。和名抄に「本草云。蕁妻。和名八久倍良」とあり。

かしめるかいかに「おもほえず身より外なる玉くしげかな」伊勢集「小箱合有」後拾遺集、雜二「わすれじといひ侍ける人の、かれぐになりて枕箱とりにおこせて侍りけるに、馬内侍「玉くしげみはよそくになりぬともふたり契りしことなわすれそ」東鑑卅五廿二「持參日時勘文入覽管」同四十二十七「持參吉書納覽管蓋」

○養育 萬葉九三十丁「吾子はぐくめ天の鶴村」十五丁四「入江の渚島はぐくもる君をはなれて」また「羽ぐくみ持てゆかましものを」言の意は羽組にて、鳥の雛をやしなひたつるに、羽の内に組入ひたすをいふなれば、古くはかくさまのみ用へるを、後世に養育の方に轉じたる也。源重之集「はぐくみし君をくもるになしてより大空をこそたのむべらなれ」相模集「わかのうらの汀のたづしはぐくまばあしのしたねぞよなかかるべき」源氏物語、桐葦「いわけなき人もいかにとおもひやりつゝ、もろともにはぐくまねおぼつかなさを云々」散木集二「こもち山谷ふところに生たてゝ木々のはぐくむ花をこそみれ」藤原爲忠朝臣集「なに事もおもひわする、春くれば齡を花には

○羽先 藤原爲忠朝臣集「五月雨に聲もさだかに鳴わたり羽さきしはれぬ時鳥哉」同「天の川はしだわたすかさゝぎの羽さきにのぶる草むしろ哉」

○葉さき 新撰六帖、六、信實朝臣「春かけてはさきいろづくわかへでさもあらましをなにいそぐらん」

○はさま 間 狹間なるべし。隆信集、戀四「もの、はさまにかくされて」葵花、月華「こきでんのはさまより」大和物語「したすだれのはさまのあれたるより」同「したすだれのはさまより」いせ物語「むかし清涼殿のはさまをわたりければ」おぼば物語、一之下「彼ふみを問より火の光のあたりたりけるに見れば云々」

○はさみ 錄 新撰字鏡に「録、錠也。波佐彌」

○はさみばこ 挿箱 日本紀略云「天德三年云々。今年人民頭腫。世號「福來病」と見えたり。頭兩頰のふくらぐよりかくいひて、即「福來病」の借字なる

○はさみばこ 「はさみばこもち」を見よ。

べし。長元二年九月十日ごろにも、又此病世におこれる事見ゆ。今云挾箱の類なるべし。

○はさら ばさら繪 物のそゝけたるをいふ北條九代記八、青砥左衛門條「したしきによりて非を隠さず、私をわすれて正直を本とす。邪欲奸曲の輩おのづから恥忍れて行跡を直し、心さしを改め上に婆沙羅の費を省き、下に恨る庶民もなし云云」

同「正嘉元年十月十二日、將軍家の仰として云云。惣て大酒遊宴に長じ、分に過たる婆沙羅を好ミ、傾城、白拍子に親しみ、強縁、内奏専ら誠ベシ」太平記、卷廿一、佐渡判官入道流刑條「例ノバサラニ風流ヲ

ツクシテ」同卷、廿四、天龍寺建立條「ソロナルバサラニフケリテ」同卷、廿九、阿保秋山河原軍條「サレバソノ頃、靈佛靈社ノ御手向、扇ウチハノバサラ繪ニモ、阿保秋山ノカハラ軍トテカ、セヌ人ハナシ」同卷、卅五、北野通夜祭「政道ノ爲ニアタナルモノ、無禮、不忠、邪欲、功誇、大酒、遊宴、跋折羅」など見ゆ。千年經云「若爲降伏一切大魔神」當於跋折羅乎」ある、此跋折羅は梵語にて、翻譯名義集に譯して、金剛といひ、その金剛は、いと堅

上に婆沙羅の費を省き、下に恨る庶民もなし云云」

同「正嘉元年十月十二日、將軍家の仰として云云。惣て大酒遊宴に長じ、分に過たる婆沙羅を好ミ、傾城、白拍子に親しみ、強縁、内奏専ら誠ベシ」太平記、卷廿一、佐渡判官入道流刑條「例ノバサラニ風流ヲ

ツクシテ」同卷、廿四、天龍寺建立條「ソロナルバサラニフケリテ」同卷、廿九、阿保秋山河原軍條「サレバソノ頃、靈佛靈社ノ御手向、扇ウチハノバサラ繪ニモ、阿保秋山ノカハラ軍トテカ、セヌ人ハナシ」同卷、卅五、北野通夜祭「政道ノ爲ニアタナルモノ、無禮、不忠、邪欲、功誇、大酒、遊宴、跋折羅」など見ゆ。千年經云「若爲降伏一切大魔神」當於跋折羅乎」ある、此跋折羅は梵語にて、翻譯名義集に譯して、金剛といひ、その金剛は、いと堅

強にしモいかなるものをも擊碎くと云心より轉じて、その碎けたる形のかたちにとりなしたるにやらん。太平記に見えたるは、皆正實ならぬ事にて、今俗にいふばさらと同じころ也。或人いはく、文選註云、婆娑放逸貌とあれば、太平記にいへるは、此婆娑の下へらとつけていふにやといへり。猶可考。

○はさら 簪 拾遺集、雜春「松をはしにて、たべ物を出して侍けるに」大和物語「はしには梅の花のさかりなるををりて」

○はし 簪 何ばしし給ふななどいふばし也。しのひね物語上「母のもとへゆき給へることばしの給ふなどと云々」新撰六帖、かくれづま、爲家「こぎかへるみしまがくれのもかり船はにばしこふな人しけすのみ」

○はしか 俗に疹といふ病は、和名鈔云「癰瘍一名子、ホムハクル」是なるべし。今俗ハシカといふは、愚按に、此瘡、瘡頭赤。故にハシアカの略なるべし。築花物語、うらぐのわかれの巻に云「ことしがいのものがさにはあらで、いとあかきかさの、こまかなるのみ」

○はしお 俗に疹といふ病は、和名鈔云「癰瘍一名子、ホムハクル」是なるべし。今俗ハシカといふは、愚按に、此瘡、瘡頭赤。故にハシアカの略なるべし。築花物語、うらぐのわかれの巻に云「ことしがいのものがさにはあらで、いとあかきかさの、こまかなるのみ」

しがきかともみゆるかなとびおくれつゝかへる雁がね」源氏、浮舟「はしがきに水まさるをちのさと人」空穂國譜上「はしがきに、これはなめげなれど、こゝにある人の云々」

○薺 薺 はじかみは齒盛の意也。これを食へば辛味の口に疼きて、歯の盛む心のすれば也

和名抄に「生薺、和名久禮乃波之加美。俗云、阿奈波之加美。乾薺、保之波之加美」字鏡には、「干薺、久禮乃波自加彌」大神宮儀式に「種薺」と云も見ゆ。又

和名抄に「蜀椒、奈留波之加美。」云。木佐波之加美。葛椒、以多知波之加美。吳茱加波々之加美」などあれ

ば、もとは辛き物の總名なりしにやありけん。

といひ、又百文に足はぬ錢を、はしたといふ。此語はもと間を訓て、物のあひひをいふは、古今集雜下

高津内親王「木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべなり」是は竹は木と草の間ひなるものにて、わが身のいづ方へもつかぬよしを歎き給へる也。又乳母を、間人といふも、母と他人との間のよし也。橋も兩岸のあはひにかへり、箸も

るいできて、老たるわかき上下わかす是をやみの、しりて、やがていたづらになるたぐひもあるべしと云々」是麻疹なるべし。疱瘡にはあらで、赤き瘡とのみいひて、名をさざるは、其比より始て痘行せしに、やあらん。又みねの月の巻に「ことしはあかもがさといふものいきて、上中下やみの、しるに、はじめのたびやまぬ人の、此たびやむなりけり云々」〔萬葉二年ヨリ今年承暦元年マテ五十三年〕事許也、布引巻云「四五月ばかりよりあかもがさといふ事いできて、世の人やむなど聞ゆる。六七月許になりては、いみじうやみまさりて、のこりなく聞ゆ。

五十三年にいできたられば、老たるわかきとなく、おや子もわからず、ひとたびにやみたれば、おきたる人すくなくありける。六七十の人は、人のとともに少ければ、いといみじくなもありける。かんのとの、うせ給ひしをりは、いとかくはあらざりけり。三百年ばかりになりたるになん云々」按に、三百年ばかりといへるは、桓武帝延暦九年、痘瘡流行の事なるべし。それはあかもがさにはあらず。

○はしがき 端書

山家集、上「玉づさのは

食と口とのあひだにわたれり。又是を木の端、片端なども云より、奴婢ともいひ、はした者ともいふ也。枕冊子六十四段に「はしたなきもの、こと人をよぶに、われかとてはしり出たる。まして物とらするをりは、いかば」とあり。又竹取物語に「みこは立つもはした、居るもはしたにてる給へり。日のくれねればすべり出たまひぬ」などいへるは、かのいづかたへともつかぬ方よりうつりて、俗に手持ぶさたにて、しかたがなくなりにたる也。端錢を、はしたといふも、百文にも足はず、又三文、五文にもあらず、いづらへもつかぬほどを云なれば、同じ事也。武家の下部を、中間といふも、もとは此中間を文字ころにいひそめて、一の名となれるなるべし。猶これら的事は鐘の響中卷八十に委くいへれば、此はたゞその一端を云のみ。

○はしたなし　夫木抄、卅六、俊頼朝臣「ふみみすときくにつけてもうたしめのはしたなきまでねる、袖かな」

○はしたなむ　夫木集、卅六、雜、俊頼朝臣「まづきては人めもしらすあたへじをなにさまあしくはし

た、なめけん」
○はしちか　夫木抄、十三、秋、頼政「いもこかな」

○橋づめ　天智紀重謠に「子知波、志能。都、梅能

阿素彌爾。伊提麻柄古」萬葉、九に「大橋之頭爾家

有者」催馬樂、竹川に「たけかはのはしのつめなる

花ぞのに云々」とあり。都米は軒の端といふに同じ

くて、橋の端を云故に、萬葉に頭とは書るなるべし。

○はしへく　藤原爲忠朝臣集「よこ雲のわかる

、空に子規ころをつれ行山のはしへく」

○はしふね　バシケアネと後世にいふ物也。新

撰字鏡に「解艇小舟。浮於水能往來也。波志布禪」

朝恒集「秋かせにまかせてせとをわたるかなすまの

うらわのあまのはし船」

○はしよる　「つまげる」を見る。

○はしり　今俗に、野菜などの、時より早く世に出づるものをしてしりといへり。夫木抄十二、秋、權信正公朝「みしふつき植わさ田のはしり穂にいやほどのきよとこそはみれ」

きははたいたなどの事也」延喜太神宮式^{廿六}「波、太板十三枚」愚管抄、三「義朝は又六波羅のはた板のは迄かけ寄て」

○はだか　裸　あかはだ　裸也。肌明の義なるべし。然れば赤はだかといふは、明肌明と重ねたる詞也。うつば、藏開の巻に「はだかつるはぎにてさわがれし云々」とあるは、今の高股立にて、脛を高く肌明にしたるを云。又云、裸をはだかといふは、膚明の義なるべし。裸苑などいふは、毛の児などにもいふ詞也。垂仁紀に、秃鶴とあるも同意也。又古き歌に、阿加波陀能山とよめるは、准

同意也。又古き歌に、阿加波陀能山とよめるは、准へいふ詞なるべし。史記秦始皇本紀に「伐湘山樹一株ニ其山」

○はたけ　はたは乾田の義、今世に水田に對へて、陸田をはたといふはよし。はたけといふは陸田にて、古くは其陸田に植たる穎をいひしを一に混じたるは後の誤也。萬葉十八^{三十}二丁祈雨歌に「あめふらず日のかさなれば、植し田も蒔し波多氣も、あさごとにしばみかれゆく」とよみて、植し田に對へて

○はしり馬　宇つ保春日詩「はしり馬十疋」

○走馬にもむち　後撰集十九離別、名をば右馬といひけるに「をしとおもふ心はなくて此たびは行鞭罷不^レ去^ニ其背」

○はしをくだす　空穗、祭使八「御まへことに馬にむちをおふせつる哉」説苑云「騒驥日馳千里^{ハシ}」

○葉すくな　夫木抄、卅、雜、信實朝臣「葉すくな吹からざる、浦松のしは風さむみなほたてる哉」

○はた　機　古今六帖、はた「さほひめのおりかけさらすうすはたのかすみたちきる春の野邊かな」夫木抄、卅三、平祐寧家集「うすはたにおれる衣ぞ夏きても春のかけつゝをしまれしかな」羅といふ詞、古く天武紀にも出でたり。

○はた　端　空穗後蔭下「此中にいたづらなる所はみのはた、鼻のみねなりけり」

○はたいた　古事談、二「大炊御門面ニハタ板ヲ立テ穴ヲアケタル所アリ」源氏蓬生、河海「いたが

たなめけん」
○はしちか　夫木抄、十三、秋、頼政「いもこかな」

○橋づめ　天智紀重謠に「子知波、志能。都、梅能阿素彌爾。伊提麻柄古」萬葉、九に「大橋之頭爾家有者」催馬樂、竹川に「たけかはのはしのつめなる花ぞのに云々」とあり。都米は軒の端といふに同じくて、橋の端を云故に、萬葉に頭とは書るなるべし。

○はしへく　藤原爲忠朝臣集「よこ雲のわかる、空に子規ころをつれ行山のはしへく」

○はしふね　バシケアネと後世にいふ物也。新撰字鏡に「解艇小舟。浮於水能往來也。波志布禪」朝恒集「秋かせにまかせてせとをわたるかなすまのうらわのあまのはし船」

○はしよる　「つまげる」を見る。

○はしり　今俗に、野菜などの、時より早く世に出づるものをしてしりといへり。夫木抄十二、秋、權信正公朝「みしふつき植わさ田のはしり穂にいやほどのきよとこそはみれ」

いへり。

○はたけするれん 岛水練 さがのものがたり「はたけ水れんとかやの風情ばかりおほく侍り」
太平記・十四大渡山 晴合戦「此間島水練しつる者ども、弓を
はづし、甲をぬきて、我さきにと降人に出ける」
朝俚諺云「藤原良基公嵯峨野物語云、はたけ水れん、
すびきの精兵、うさぎ兵法、陰の舞などいへり。こ
れは小藝をたしむもの、他の藝者をねたみ、其きか
ざる所にては、そしりをまくるたぐひ、又は知さ
る事をも、しりたるふりをして、いひまはるをもい
へり」

○はたけせり 新撰六帖・六、正三位知家「いたづらにある、そのふのはたけせりわびしげにても
あるよなりけり」

○はたご 旅籠 和名抄、竹器類「籠。唐韻云
云。籠和名古俗用旅籠二字。云 竹器也」新撰六帖、夏の

波太古。今按所出未詳

○はたごや 旅人を宿す家をはたご屋といふは
旅行具より出たる也。和名抄云「第。唐韻云。籠候當
古反。漢語抄云。波太古用旅籠二字。飼レ馬籠也」とあり。はたご馬とい
ふも此のゑなり。

○はなさす 新撰六帖・二、衣笠内大臣「ゆき
のしままきのこ牛のみとせにてはなさすほどもたへ
がたのよや」

○はだし 跪 新撰字鏡に「跣波太志」とあ
り。跣は、膚足にて沓を着ず、素足の膚を、直土につ
くるを云也。空穗・藏開「さんひき給て、はだし
つるはぎにて、はしらせ給て、殿上までわらはせた
てまつらせ給ふ」平家物語・十二、六代御前の段に
云「齋藤五、齋藤六、も、御輿に付てぞ參りたる。北
條乘かへどもおろいて、馬に乗れといへどものらず
大覺寺より六波羅までかちはだしにてぞ參りたる云
々」

○はたごく 藤原爲忠朝臣集「あさ露にこねれ
る」

野、衣笠内大臣「たび人のはたごの駒の行すりに夏
の、草をすきめやはせぬ」空穂吹上「しろがねのはた
ごうまは左大將に」同同「一所に白銀のはたごひと
かけ」今昔、廿八、廿八「旅籠ニ繩ヲ長ク付テ」

○はたご馬 萬葉二三十「八多籠良家よるひるい
はすゆく路を」新撰六帖・二、爲家「たび人のはた
ごのむまのゆきすりになつのの草をすきめやはせ
ぬ」宇治拾遺、七十二「物などくひてまかれといへ
ば、うけ給りぬとて居たるほどに、旅籠馬革籠馬な
どつきたり云々。又のどのかわけば、水のませよと
て、きえいのやうにすれば、ともの人々手まとひを

とくしきさまに見ゆれば、まことにさわざまとひ
て云々。はたご馬革籠などつきたり。などかくはる
かにおくれては参るぞ。御旅籠馬などは、つねにさ
きだつこそよけれ。とみの事どもあるに、かくおく
るゝはよき事かはなどいひて云々」旅籠馬は食物を
付、水などをも物に入て付など、用意する事と見ゆ。

○はたごく 虫名 和名抄云「本草云。蟻蛭ハチヅル二音
く聲在荒田野者也」とあり。今初言を濁るは訛也。
○はたまた 將又 はたは邊と同語なれば、
將又といひて、かたはらに又といふ意也。はたの意
は委く雅言の部にいへり。

○はだふれる 神樂譜、脇母古「わざもここに、
一夜はだふれ、あいそあやまりにしより、鳥もとら
れず、鳥もとられずや」

○はたる 田舎にて借錢をはたり来るなどい
ふ。古事記上卷に「其兄強乞徵」萬葉十六十二
に「戸長等我課役徵者汝毛半甘」などあり。

○はちしむる 清輔集「静達入道、昔男にてお

記『文安五年八月一日云々。八朔禮事何頃ヨナ有之事哉之由尋申候處、後鳥羽院末方ヨリ出來歟。但不得所見慥。所證先代ヨリ沙汰初ル歟。鎌倉ヨリ事起之由所語傳也。清家之記。嘉元之頃之記。此事見之近年如此之由注付云々』辨内侍日記後深草院寶治元年曰『八月一日、中宮の御方よりまわりし御たきもの、世のつねならずにはひうつくしう侍りしかば「けふは又そら焼物の名をかへてたのめは深きにはひとぞなる」八朔をたのむの節といふこと、既に此うたに見えたれば、古き事なり。たのむの節の事別に出。さて此節もと公事にもあらず、田家にていはひし事の流例となりしなるべし。東鑑、三十八云「寶治元年八月一日辛巳。恒例贈物事可_レ停止之由。被_レ觸_レ諸人。令_レ進_レ將軍家_レ之條。猶両御後見之外者禁制」梅松論、下云「或時夢窓國師談儀の次に、先將軍_レ尊氏_レの御事を仰られけるは、御心廣大にして物惜の氣なし八月一日、憑などに、諸人の進物とも數もしらず有しきども、皆人に下し給ひし程に云々」難波鑑、四云「八朔是は大やけごとにてはなし。さればたしかなる本説あらず。建長の比より祝ひ来れると也。始

めは田の實とて、土器に米を入れて、人のもとへ送けるとかや。其後次第_レに世人さかんにけふをもてあつかへると也。今童の行器をもてあそびの送りとせるも、今としの米をいる、うつはものにや云めるは、秋稻の初穂を奉りし比の言の残れる也。祈年祭祝詞に「皇神等能依左志奉者。初穗乎波千穎八百穎爾奉置_レ氏云云」廣瀬大忌祭祝詞に「皇神能成幸賜者。初穂者汁爾母穎爾母。千稻八千稻爾引居氏云云」

○初穂 神佛に獻る物を、何によらず御初穂と云ふは、秋稻の初穂を奉りし比の言の殘れる也。○初穂 神佛に獻る物を、何によらず御初穂と云ふは、秋稻の初穂を奉りし比の言の殘れる也。○初穂 神佛に獻る物を、何によらず御初穂と云ふは、秋稻の初穂を奉りし比の言の殘れる也。

○初夜 堀川院御時百首、阿闍梨隆源「冬きてはこよひぞはつ夜、いつのまに片敷袖のさえわたるらん」夫木抄、十六、冬、隆源法師、歌、上に同じ。

○はづれる 空穂、俊蔭「はりのみ、いとあきらかなるに、しなの、はづれをいとよきほどにすげて、おうなのきぬにぬひつくとみ給へし」

○はづれる 物の列にられたるを、はづれるといふも雅語なり。枕冊子に、后宮のうた「もとすぐがのちといはる、君しもやこよひの歌にはづれてはをる」はは離_レ、つれは連_レにて、離_レ連_レか。

○初夢 山家集、上、立春の朝よみける「年くれぬ春來べしとは思ひねのまさしく見えてかなふ初夢」とあるをみれば、既に此比よりいひしことくみゆ。

○はとむね 胸の高きを鳩胸と云。和名抄に「針灸經注云。鳩尾骨。臍前骨也。和名無奈保禪」とあら。

○花 藤原爲忠朝臣集「千よのぶる菊のよはひを君にぞとおくる心に花はありけり」

○鼻 出鼻煮鼻 鼻祖 鼻が高い鼻にかかる

野、山里の入口を、鼻と云ことあり。いはゆる竹ヶ鼻、祖ヶ鼻などの類也。こは其前に出張たるよし歟又入始のよしにも有べし。又茶の出鼻、煮鼻とも云。

こは出花の謂か。又出始としてもあるべき也。言餘抄に古書を引て、中臣伯意美麻呂者、中臣氏鼻祖といへるは、始祖の謂なり。玉篇云「鼻增匀面之中部。易民爲鼻。鼻始也。人之胚胎鼻先受_レ形。故謂_レ之祖_レ爲鼻祖」とあり。萬葉十九二十に「鶴河立取左牟安由能之我波多婆吾等爾可伎無氣念之念婆」久老云「此波多は鰐にはあらず。其初を云也」といへり。

○鼻紙 ふところ紙 空穂、國譲下「硯のもとにたちよりて、筆を取て、ふところ紙に書きつけ、こしにゆひつく」宇治拾遺に「鼻紙だいにおきたる紙をとりて」

○花ごろ 六百番歌合、正三位季經卿「いつ

しかとうつろふいろのみゆるかな花ごゝろなるやへのしら菊」保憲女集「はるがすみたな引わたるけふよりやなべて草木も花ごゝろつく」續後撰集、基俊

「たのめどもいでやさくらの花ごゝろさそふかせあらば散もこそすれ」萬代集、戀五、兵部卿親王元良

「ちりぬべき花ごゝろぞとかつみつゝたのみそめけん我や何なる」齊宮女御集「へだてける心をみれば山吹の花ごゝろともいひつべきかな」後拾遺集、雜四「ちかき所にはべりけるに、おとし侍らざりければ、村上の女、三宮のもとより思ひへだてけるにや花ごゝろにこそなどいひおこせたる返事に」源氏宿

木「花心におはする宮なれば」匂宮「ちりぬべき花ごゝろにこそなどいひおこせたる返事に」源氏宿

○はなこゑ 真聲 源氏、須磨「いつとなく別といふもじこそうたて侍るなる中にも、けさは猶たぐひあるまじう思ひ給へらるゝ程かなと、はなごゑにて、げに漫からずおもへり」今昔、廿八廿「音ハ鼻音ニテ高カリケリ。物云ヘバ一内響テゾ聞エケル」磁器などの破たるを打ならし、はな聲なりといふは、人の泣んとする時、ものいふは、聲ぶるひて聞ゆるが、彼ひゞきの入たる器をならすに似たる故、しか

木「花心におはする宮なれば」匂宮「ちりぬべき花ごゝろにこそなどいひおこせたる返事に」源氏宿

○はなこゑ 真聲 源氏、須磨「いつとなく別といふもじこそうたて侍るなる中にも、けさは猶たぐひあるまじう思ひ給へらるゝ程かなと、はなごゑにて、げに漫からずおもへり」今昔、廿八廿「音ハ鼻音ニテ高カリケリ。物云ヘバ一内響テゾ聞エケル」磁器などの破たるを打ならし、はな聲なりといふは、人の泣んとする時、ものいふは、聲ぶるひて聞ゆるが、彼ひゞきの入たる器をならすに似たる故、しか

の君には簪とりして、西の對ひんがしのたいに、花々として住せ奉り給ふ云々」

○花火 本草綱目八「鐵落。時珍曰。生鐵打鏽皆有花出。如蘭如蛾。故借之鐵蛾。今煙火家用之。」

○鼻捻 梅窓筆記、上、人車記「仁安二年十月廿一日取左右居飼廿人變束如常。但大烏帽子蒲扇鼻捻已上拂

○花の弟 夫木抄、卅五、雜、前大納言隆房「い

つのに霜のおきなとなりぬらんきくをば花の、おと、おもふに」夫木抄、十四、秋、後九條内大臣「秋のいろの花の、おと、と聞しかどしもの翁とみゆる白

菊○萬葉七六十に「甚多毛不零雨故」十丁六十に「甚多毛不零雪故」又六十「甚毛夜深勿行」十三丁に「天地之神毛甚。吾念心不知哉」などあれば

古言にて、古くは歌にも嫌はぬ詞なりし也。本居氏説に、はなはだと云ことは、中昔の物語文などには

をさく用はぬ言にて、源氏物語などには、ことさらには、ふつかなる儒者の語に用ひたることあり。

當時雅やかならぬ言になりたるなるべし。されど漢籍にては、甚字必ず然か訓むは古言ののこれるなり。

書紀に、甚字は多くニヘサニと訓たれど、當らぬ訓なり。へさは物の多なるを云言にて、其由、肥後國

雲のけしきはなはだあしといひて「源氏、少女「おほしがいもとあるじはなはだびさうに」大鏡三「女君はいとはなはだ心うき御有さまにて」

○はなくしき 落葉物語、一之上「大君、中

いふ也。狹衣、一上に「さつきの空にはおそろしきものあるを、とのたまふまゝに、はな聲になり給ひぬなり云々」

○鼻たれ 人を嗤て鼻たらしめ、鼻たれめ、なものあるを、とのたまふまゝに、はな聲になり給

どいふことあり。新撰字鏡に「體。奴東反。去。多漢。波奈太利」とあり。

○はなちかみ 禁腋秘抄「殿上の處に奥のするのかた簡をたつ。殿上人の名を三段にしためたり。

上は四位、中は五位、下は非藏人なり。名の下に紙をおして、上日をつく。數番といふ。夜は帯に入、

晝は帯たゝみて、机の下に置」とあり。

○はなづく 主人の意にたがひて前とほざけらるゝを、鼻を突といふ。空穂物語俊蔭卷に「御ともつかうまつりたりし人々は皆はなつきはなたれぬ」

清輔袋草子云「少突鼻氣也」

○はなにかくる 「はな」を見よ。

○花ぬす人 公任集「わのが名は花ぬす人とたばたてたゞ一枝はをりてかへらむ」和泉式部集、同_{コレハ公任和泉答ナリ}

○花の弟 夫木抄、卅五、雜、前大納言隆房「い

の君には簪とりして、西の對ひんがしのたいに、花々として住せ奉り給ふ云々」

○花火 本草綱目八「鐵落。時珍曰。生鐵打鏽皆有花出。如蘭如蛾。故借之鐵蛾。今煙火家用之。」

○鼻捻 梅窓筆記、上、人車記「仁安二年十月廿一日取左右居飼廿人變束如常。但大烏帽子蒲扇鼻捻已上拂

○花の弟 夫木抄、四「永曆元年七月、清輔

朝臣家歌合」さくら法橋顯昭「わざもこがはこのねの糸櫻むすびおきたる花かとぞ見る」太平記四笠

母、波那美波志、比斯那須云云」とよませ給へる、齒並はし菱如なり。今も専ら云ことなり。

○花むすび 夫木抄、四「永曆元年七月、清輔

山の糸櫻むすびおきたる花かとぞ見る」太平記四笠

置囚人事、参考天正本「師賢卿をば千葉介に預られて、下總國へ下向と聞えしかば、花の都を遠々と、東國

十九

の末に越させ給はんする御いたはしさよなど、人々申けるを聞給ひて云々。此北の臺と申は、花山院入道大臣家定の御女、繪書、花結、詩歌、管絃の道をさはめさせ給ふのみならず、眉目かたちならびなくおはしませば云々」

○華も實もあり
野。華無し實則史 源氏物語云、明石上のことを

「さ月まつはなたばなの花も實も具して、おしおれるかほりおぼゆ」

○花やか 萬葉十二十七「紫に染てしかづら花や

かに」

○はにかむ 田舎にて、小童などの、もの恥ぢおくれたる状なるを、はにかむといふことあり。新撰字鏡に「體櫨担、同作則加反提也。波爾加半又伊女久」とあり。是より出たる詞なるべし。

○はにふの小屋 黄土生小家にて、土もて塗こめ、黄土もて築上て、すまへるを云。萬葉五「布

勢伊保能麻宜伊保乃内爾直土爾莫解敷而云々」今も邊土には此さまなる栖あり。

○はにわり 一人にて、男女の陰を兼たる者を

○はにかむ 田舎にて、小童などの、もの恥ぢおくれたる状なるを、はにかむといふことあり。新撰字鏡に「體櫨担、同作則加反提也。波爾加半又伊女久」とあり。是より出たる詞なるべし。

○はにふの小屋 黄土生小家にて、土もて塗こめ、黄土もて築上て、すまへるを云。萬葉五「布

勢伊保能麻宜伊保乃内爾直土爾莫解敷而云々」今も邊土には此さまなる栖あり。

○はにわり 一人にて、男女の陰を兼たる者を

○波伐加利^{三十}「白雲者行憚而云々」今の言には、

かり多き、乍憚など云も、是より轉じたるなり。

○はトキ 膝巾 脚絆 行纏 今俗に脚

絆と云は、すねばかりにはくもの也。又股は、やさと云は、今云股引也。もと行纏の轉じたる物にやとお

もへど、和名抄にも並べて出せれば、これも古きもの也。但し其制の異同ならんは、慥かにしりがたし

和名抄十四行旅具「行纏。釋名云。行纏音興、騰同行纏和名無加波岐行纏也。言裏脚可以跳勝輕便也」同。「行

纏。唐式云。諸府衛士人。別行纏一具纏音直連反。本朝式云脛巾^{俗云波}「拾玉集四、賀茂法樂百首冬「大原の

炭をいたいくしづのめははいきばかりや情なるらん」此外むかしは脛巾、苧脛巾などの名あり。

○灰占 夫木抄、十八、冬、小侍從「手すさびにとふはひうらのあたりまでうづめどきえぬおもひなりけり」

○はひえ 這枝 金葉集、春、大納言經信「池

にひつ松のはひ枝にむらさきのなみおりかくる藤さきにけり」夫木抄、舟、雜、俊頼朝臣「すまのうらやなささにたてるそなれ松はひえを浪のうたぬ日ぞな

はにわりといふこと、今も國によりては云所あり。和名抄云「半月。内典云。五種不男。其曰半月。俗訛云波爾和利。一云謂其男而不レ男。一月卅日其陰十五日爲レ男。十五日爲レ女。名半月也」とある。此心ばへより出たること歟。

○はねうつ 保憲女集「小夜千鳥はねうつ波の音すなりよもの春風水さくらし」

○はねしほる 夫木抄、十七、冬、大納言師時卿「もがみがはいはうつ波にとびかひてはねしほれぬと千鳥なくなり」

○はねた、む 夫木抄、十二、秋、源仲正「いづくにか初雁がねのわたるらんはねうちたゝみやすむよもなく」

○はねる 「飛はねる」又物を「はねかける」などいふ。萬葉二「四十奥津加伊痛勿波禰曾邊津加伊痛莫波禰曾」

○はばゝ 「おぢゝ」を見よ。

○はゞかり多き 「はゞかる」を見よ。

○はゞかる 「はゞかりながら」はゞかり多き

萬葉三「七十白雲母伊去波伐加利」また「天雲毛伊去

○はひくる 「夫木抄、十一、秋、俊頼朝臣「風ふけばはぎのはひえに波越てえもいはぬまのみぎはをぞみる」

○はひくる 和泉式部集「松かきにはひくる葛をとふ人は見るにかなしき秋の山ざと」

○灰をさす 堀川院御時百首、中宮權大進仲實「白露のうつしのはひやさしつらん八入の岡のもみぢしにけり」

○はひとる 奢取 空穂、藏開「よりあきらかまへてなんばひとりて侍りと申給へば」空穂、藤原君「ばくち、京わらはべ、數しらず集りて、一のく

るまをばひとり」とりかへばや「あながちにばひとつ見て見るに」源氏夕霧「れいの文をぞいぞきかき給ふ。いと心づきなしとおはせど、ありしやうにも、

ばひたまはず」

○はひのばる 賴政卿集「笏さびはふくのばる位山雲踏ほどにいがて成らん」

○はひり口 後撰集春上みつね「いもが家ののはひりにたてる青柳に今やなくらんうぐひすのこゑ」

○はふく 今俗にはふくの體、はふく

○はふく 今俗にはふくの體、はふく

にげ返るなどいふことあり。唐物語に「あしなえたるもの、はふく、ぬざりつ」とあるを見れば、這々の意なるべし。字音とはきこえず。宇治拾遺、二廿七「此女はふくのぱりけり」顯輔集「いたはる事ありてえまゐらぬを、殿よりせめておほせらるればはふく參りて」堤中納言物語、むしめづる姫君「はうくも君があたりをしたがはんなかきこゝろのかぎりなき身は」頼政集「翁さびはふくのぼる位山雪ふむほどにいかでなるらむ」

○はまぐり 夫木・六、俊頼「山吹をかざしにさせばはまぐりを井手のわたりの物とみるかな」散木「家綱がもとよりはまぐりをおこすとて、山吹を上にさして書付て侍ける」

○はみ虫名 真むし 嘰をはみといふは、人を喰虫ゆゑに云なれど、おのづから反鼻の字音に通へるもあやしきもの也。此類常に多かるを、世の人字音とのみおもひて過めり。和名抄にも、蝮蛇は和名波美、一名反鼻、其音片尾といへり。まむしははむを恐みて云名也。

○はめ 水目矢 物の間隙に物を採入るを、

はめるといふ。古事記上卷大穴牟遲神條に「切三伏大樹、茹矢打立其木」とあり。水目矢といふも、茹矢の意にて、今世にも木を割に難きは檣などにて作りたる筈の如きを、其木口に挿て採を、矢とも、ひめ矢ともいへる是也。又「狐に波米なで」などよみて、喰ふをいふも、茹の意は同じ心ばへ也。又是を躰語にして、家造の具にはめといふもある也。

○はやかせ 堀川院御時百首、藤原基俊「我妹子が門田にうるはやかせの苗代水をいかにひかまし」

○早鐘 元長卿記に「大永五年二月二日。云々。相國寺有早鐘。未聞字細無覺束」

○はやさ 急雨 田舎人の言に、急雨をはやさと云はばやさめの略語也。新撰字鏡に「凍暴雨」

波也佐安女」

○はやす そやす 人の立舞を見て、其を賞讃をはやすといひ、又其舞に鼓吹し、拍子などとるをもはやすといひて、既に猿樂には、はやしと云名目もありて、囃子と書ならへり。こはもと譽美す方より出て、つひに一つの名となれる也。囃字も説文

に舞聲を助也とあれば、よく適へり。又賤き詞に、ほめそやすともいへり。こはそゝのかすと、築すとを二合していへる也。是も詞の常なればひが事にはあらじ。

○はやて 夫木抄、十九、雜、爲家「波しらむおきのはやてやつよからしくたがいそによるともふね」相模集「野分いみじうしたるひ、ゆるぎのもりはいかと人のとひたりしに「はやちふくしげみのゝらの草なれや、おきてはみだるふせばかたよる」(しまき)の條参照)

○はや水 曾根好忠集、九月をはり「復おろすあとのはや水せきとめて暮行秋を見るよしもがな」○はやる 大鏡に「堀川の攝政のはやり給ひし時に、此東三條殿ハ御つかさをもとめられさせ給ひて、いとからくおはしまし、時に云々」とある、こは建速などいふ速にて、其勢ひの世にときめくをいふ也。今世にも權家などの世にはやり給ふとやうにも云ふ。又流行の意に云も、ときめく方より轉じたるにも有べし。さよのねざめ「茶香の具足はやる比は」

○生 草木の生るをはえるといふも古言也。萬葉二三十に「川藻毛絶。干者波由流」

○はらぎたなし 落窓物語、一之上「こゝろづきなく腹、ぎたなしと見てしかば云々」空穂、只こそ「けしからぬ所にかよひいきて、かなしき事を見る」

○はらぐろ 金葉集、戀下、讀びと不知「はなうるしこやぬる人のなかりけるあなはらくろのきみが心や」

○はら立 一おちくば物語、一之上「いとほしくて腹たてどうぞきもせず云々」同、同「腹だち怨み

給ひそとはらたせあへす、たはむれしたり云々」

神中抄、六、九「神はらをたちて」後拾遺集、雜「赤染衛門うらむる事侍ける比遣はしける右兵衛督朝任「わたのはらたつしら波のいかなればなごり久しうみゆるなるらん」返し、赤染衛門「風はたゞおもはぬかたに吹しかどわたのはら立なみはなかりき」

○はらつゝみ 空穗「思慮はかなきやまがつまでも、はらつゝみをうち」土佐日記「ふなことものは、

は、はつゝみをうちて、うみをさへおどろかして、な
みたてつべし」

○ははつゝみをうつ
「赫胥氏之時。民居不^{シテ}知^シ所^ノ爲^シ行^フ不知^シ所^ノ之^ヲ。
舍^ス哺^ス而^{シテ}熙^ス。鼓腹^ス而^{シテ}遊^ス」又見淮南子・賈親政要云「樂舞在
上。百姓亦云。耕田而食。鑿井而舍。鼓腹而去。帝何力^{アラン}其間^{ハラフ}」

矣。正宗贊云「鼓腹自高歌」土佐日記云「正月七日、此な
がびつのものは、みな人わらはまでにくれたれば、
あきみちて、ふなこどもは、ははつゝみをうちて、
うみをさへおどろかして、なみたてつべし」とあり。
よろこびたのしむことをいへり。莊子・馬蹄篇云「赫
胥氏之時。民舍^ス哺^ス而^{シテ}熙^ス。鼓^ス腹^ス而^{シテ}遊^ス。民能已^ス此矣
云々」陶靖節集卷三云「鼓腹無^シ所^ノ思。朝起暮歸眠^ス」

○ばらとりの尼
つくば問答「御はらとりのあ
まとて、七八十になる連歌師も侍りき」クボノスサ
ビ云「按摩とり也」（猶「あんまはらとりのをんな」
を参照せよ。）

○はらとりの女
菜花物語引「東宮をものへ
わたらせ給へば、まあらせ給ひなどせさせ給ひけり。
見奉らせ給ひて、なかせ給ひければ、おとゞはなに

なくいたきどころやある、はらとりの女にとらせよ
かし。我もさこそはすれと仰せられければ、なきわ
らひせさせ給ふ」

○はらばひ
詩、大雅、生民二十、「誕實匍匐注

云。匍匐。手足並行也」

○はら／＼
散々を獨りたる也。古事記上に「堅
庭者於兩股^ニ踏那豆美如^ニ沫雪^ノ蹶散^{カシマシテ}而^{シテ}神代紀に
「整散此云^ニ俱穢簸遷々箇湧^ニ尚書、禹貢に「厥土
白壤^{シホウジヨウ}萬葉廿に「あまをぶね波良々爾浮豆」など
ある是也。今、涙がはら／＼とこぼるゝなどいふ時
は、清みていへり。

○はら／＼と
藤原爲忠朝臣集「むくらはふあ
れやの月をながむれば風はらはらと影もすさまじ」

○はらひ
祓
佛事に祓をすること。江次第
壬申。天晴。午後着^ニ八省東廊^ニ行^ニ大祓。是明日爲^シ被^シ
行^ニ仁王會^{所^シ}祓^シ祓清^也とあるに、佛事を行ふ
とて、先祓をすること分明なり。

○はらふくる
世繼物語云「おぼしき
こといはぬは、げにぞはらふくる^ニこ^トちしける」

○はりひち
「はる」を見よ。

○針目
萬葉四丁十七「けせる衣の針目おちず」
○張もの
今いふ洗張なり。宇治拾遺、三丁「女
のかぎりにて、はりものおほくとりちらしてある
に、八丈うるものなどあまたよび入て」空穗、吹上
「これははり物の所、めぐりなきおほきなるひはだ
や、あこめ袴きたる女ども廿人あまり有て、色々の
物はりたり」

○はりやる
一張破
いせ物語に「むかし女云
々、うへのきぬをあらひて手づからはりけり。心さ
しはいたしけれど、さるいやしきわざもならはざり
ければ、うへのきぬのかたをはりやりてけり」

○はる
某ばる
張合
張肱
張が強
張が有
一故事要訣云「物をよくばると云は何の
字ぞ。欲々と書也。萬葉に欲字をほりと多く訓り。
頃の作「ともし火くらきかけにても、小ばかりの耳もい
となせよ」

○はりのみ
針耳
今俗に針の孔を、み、
づといふ。耳粒の意なるべし。童蒙抄に「針のみ」
とあり。めのとの双紙にも見えたり。常盤姫物語正
未詳「ともし火くらきかけにても、小ばかりの耳もい
となせよ」

欲ばるを欲ばると云しなるべし。さて此欲ばるといふのみは、此釋おだやかにて當れるが如くなれど、猶此類ひ「威勢ばる」「威ばる」「普惠ばる」「利口ばる」「意地ばる」「息ばる」等を合せ考れば、「繩張」「綱張」「氣を張」「心を張」「力を張」「意氣張づく」

「肱を張」また上に就て「張肱」「張出」「張合」「張が強い」「張がある」などの張と同例なるべくぞおぼゆる。彼「田を墾」「道を墾」などの墾も、草創のよしなれば、言の上は張と同じ。猶「梁承張」などを合せて、張廣ぐるよしの意として、いづれも聞ゆ。猶考ふべし。

○春にうづめる　夫木抄、四、春、前中納言定家「花の、ち八重たつともに空とちて春にうづめるみよしのゝそこ」
○春の戸明る　夫木抄、一、春、西行上人「しめかけてたてたるやどの松にきて春の戸明るうぐひすのこゑ」
○はれがましく　中務日記「はれがましくなる」
○はれのく　霧去　夫木抄、十六、冬、後京極攝政「時雨こしいろやみどりにかへるらん木のは

はれのく松のあらしに」
二、「堀川院をばさるべき事のをり、はれくしきれうにせさせ給ひ」

○はれマア　「あゝ」を見よ。

○はん　番　竹取「おもやのうちには、おうなどもばんにをりてまもらす」

○はんざふ

落窓物語「一之上「いかゞたらひはざうのきよげならんをしばしたまはらん云々」御かたにはいづくの匂鹽「かあらん云々」和名抄云「匂」ハナズバ移用和名波邇佐布。柄中有道可_ミ以注

水之器也。俗棟字所_レ出未詳。但和名之義或説云。

有柄半挿_ミ其内。故呼爲半挿也」とあるをみれば今たらひの小を云なるは、其物轉じたる也。

○はんじとみ

「しとみ」を見よ。

○半天　萬葉五、二十一「麻被引可賀布利。布可多衣安里能許等其等。伎曾倍脇毛」また三十「綿毛奈伎布可多衣乃云々」此かた衣は、半身の衣にて、今世に云半天の類なり。古くより身賤しく貧しき者の、便につけるおのづからわざにこそ。又今上下とい

ふものゝ、上ばかりを肩衣といふも、實は半身のよしなれば、其名の心は同じこと也。又十六卷にも、結經方衣と云あり。これは兒の服也。
○半時　土御門内大臣通親公の巖島御幸の記に「たはぶれふして、時中ばかり絶入りにし云々」今は半時といふことをときなかといへり。

○はんび　和名抄云「半臂。蔣筋切韻云。半臂の心のひき」萬葉十四三十九「赤駒を打て小緒引心ひき」十九三十「相見てしその心ひきわすらえめやも」の類もておもふべし。又六三十一「天皇のひきのまに」十一四十一「さら」に引と君がまに「また十四十八「心ゆも人ひかめやも」十四六「ひかばよりこのね」十九二十「ますらをのひきのまに」の類は引さそふ方也。いづれにいふも其落る所はおなじかれど、用ひざまの少しづゝかはる也。落窓物語に「弁の君がひきにて參りたり」とあるひきは、今もいふ手引のよしなれど、ひいきといふも猶ひきと同語ならんとぞおぼゆる。「最負」これを世にひいきと唱へなすは、備キの音の轉訛なり。文選「西京賦」張平子左有嶠函重險。桃林之塞。綴以二華。巨靈最負許備高掌遠蹠。以流河曲。厥跡猶存。○薛綜注。最負作力之貌也。堀川院御時百首、紀伊「賤の男が苗代水もひきにあはれなにとかいそぐなるらん」

○ひあやうし　火危し　火の用心　文粹卷

一、源順歌曰「夜行翁夜々警火。舊府中呼曰火危。彼誰何」今の火の用心とよびありく、即是也。
○ひいき　最負　ひき　心の引などいふ比伎を音便にひいきとはいひなせる也。續紀宣命に「人

○ひあたり　日當　新撰六帖、二、光俊朝臣「日あたりの澤のふかだのしもどけにつたひかねたるあせのはそみち」
○ひいき　最負　ひき　心の引などいふ比

火危し　火の用心　文粹卷
古事記、中卷、倭建命段に「入坐其野爾。其國造火著其野故知見歎而解開其境倭比賣命之所結囊口而見者。火打有其裏。於是云々。即著火燒

ひノ部

故其地者於今謂之燒遣也」とある、此故事に因て古は旅行く人に火打を贈れるならはしありき。後撰集に「みちの國へまかりける人に、火打を遣すとて書付ける。貫之「をり／＼に打てたく火の煙あらば心さすがをしのべとぞおもふ」公忠集に「ゐなかへ下る人の許に白き袋を青き物してすりて、火打を入れやるとて「打見てばおもひ出よと我が宿のしのぶ草してするなりけり」敦忠集に「親盛、から物使にていくに、金の火打、火糸にちんをして、緒を摺たる袋に「打つけにおもひ出づやと故郷の忍ぶ草にてするなりけり」源平盛衰記四十に日本武尊の、錦燈袋の事を云へる所に「今世までも人の腰刀に錦の赤皮を下て、燈袋と云ことは此故なり」と見ゆ。

○ひえ 稗 萬葉十一丁「打田にも稗はさま

ねく有といへど」十二十七丁「水を多み上に種まき稗を

て、かせ杖をつきてはしりまはりて、おこなふ事なりけり」雨風の折ふせぐさま也。

○ひかさる、曾根好忠集、春「わざも子がけさの朝いにひかされてせなさへあまりかひたゆき哉」

○ひがむ 僕 空穂物語、只こそ「おこなひ

すゝめる人をいなび給ふは、ひがみたるこ、ちなんする」同、藤原の君十八「そのみこは物ひがみ給へるみこにておはしましける」

○ひかりやはらぐ 和光 拾遺愚草、上「やはらぐるひかりさやかにてらしみよたのむ日本の七

の御社」千載集、釋教、崇徳御製「みちのくのちりにひかりをやはらげて神もほとけとなるなりけり」

○ひかれもの、こうた 引者小唄呂氏春秋

五卷大樂篇云「罪人非不^{ルニタカ}歌也。狂者非不^{ルニタカ}武也」

○ひき 匹 禽獸に云も、絹布に云も、比伎

はもとより此國の詞也。字書にはあらず。古事記神代に「易^{カヘル}子之一木^{モチ}乎とあるも」子一匹にの意也。雄略紀の歌に「宇摩能耶擬^{ウマナヤノイ}播をしけくもなし」とあ

○ひがいす 「ひは／＼」を見よ。

○ひがさ 檜笠 宇治拾遺、八、二丁「あか

かうの上下に、蓑笠をきて、蓑のうへに繩を帶にして、ひがさの上を、又おとがひに繩にてからげつけ

橋光興子。刑部大輔忠定孫「ひきたつる人もなざるのすてをぶねさすがに法のおしでをぞまつとよめりけるを

西園寺入道相國の御もとに奉りければ、法印に申なされけり」按するに、ひきたつるは、最負するなり。

○ひきづる 古事記上巻、八千矛神の御歌に、

「をとめの、なすや板戸を、淤曾夫良比ヒコラヒがたゝせれば、比許豆良比ヒコラヒわが立せれば、云々」萬葉集、十三

二十丁に「曾朋舟爾。綱取繁。引豆良比^{ヒコラヒ}云々。曰豆良比

云々」文選西京賦に「擎攫」源氏物語、若菜上に、

「綱^{ヒコ}いと長く付たりけるを云々。逃んとひこじろ

ふほどに」同、夕霧に「惜みかほにて、ひこじろひ

給はねば」なども見ゆ。今世言にも。物を引ありく

を引豆流と云。豆良比は、即^{ヒツ}豆理を延べたるなり。

○ひきつれて 引連 夫木抄十七、冬、源仲

もと主人、馬を牽出で、與へしよりいひそめたる詞也。聟引出といふも、壇の馬に乘らん料に牽出て得

さするよし也、御堂關白道長公御記 時代寛弘三年

○ひきたつる 夫木抄廿六、雜、安法々師「も

ち月のこまひきたて、ひやしけること、やかつらの渡なるらん」

○ひきたつる 引立

十訓抄云「信光法眼法

正月三日丙午。時々雨。右府顯光内府公季帥公住自余上達部皆來。只式部大輔一人不來。數不可及。銘酌三人。引出物馬各一疋。參內。又中宮御方數巡。有和歌事。又參東宮御在所南院。此間小西下余還。參內候宿。

北山抄。大妻條に「次曾者牽出物馬一疋。若尊者好鷹者」

馬鷹牛犬の類の引綱ありて引出るものを引出物といふは、時服錦繡裳袴等の着物をかづけ物といふが如し。延喜式、江家第等見合すべし。

○ひきのぶるやう 引伸る様 児のそだつに云ふ。しのびね物語、上「日にそへて引のぶるやうに、よるひかりけん玉かとみゆる御さまを」源氏物語、若菜、上「日々にものを引のぶるやうにおよすげ給ふ」濱松中納言物語、一「月日にそへてひきのぶるやうにめでたくうつくしう」

○ひきはだ 引盾 台記に「四五位半靴。有六位深沓。無引盾無華仙」とあり。沓などにも、ひきはだといふこと有と聞ゆ。此名のこゝろは蟾蜍膚なるべしといへり。

○ひきまと 引窓 今博風の下に附たる窓を引窓といふは、戸に綱を引て開るゑに、引窓といふと見て、安く開るやうなれど、猶もとは、博風板上音布思反和名如字。楊氏漢語抄說同」とあれば馬の腰に射あてつ

○ひきよう 比興 中昔の程は、ことにをかしこくぞ負けにける。希有にまけにけりとこそ、申べけれど、一座のひきようにてはべりき云々

○ひげをはさむ 海人藻芥云「凡彼御代鳥羽已前は男、眉の毛をぬき、鬚をはさみ、金をつくる事、一切無之。及末代毎度矯飾の至也」梅窓筆記云「古

代は鬚ヲソラザルコトノヤウニイヘド、源氏物語柏木、御ひげなどもとりつくろひ給はねば、しげりておやの卿よりもけにやつれ給へり」と有ヲミレバ此頃ハ既ニ鬚ヲスレルニヤ」

○ひこ 「まご」を見よ。

○ひこしろふ 「やに」を見よ。

○ひこばえ 葉 新撰字鏡に「梗穀亦更生、比古波江」

○ひざう 秘藏 維摩經五問疾品五「一切菩薩法式悉知。諸佛秘藏。無不得入」注什曰「秘藏謂佛身口意秘密之藏」後漢書十上鄧皇后紀「殤帝康陵方中秘藏。及諸工作事減約十分居一」注「方中陵中之家藏之中故言秘也」

○ひざかり 日盛 夫木抄、九、夏、俊賴朝臣「ひざかりはあそびてゆかんかげもよしまのゝ萩原風たちじけり」

○ひざご 「ひしやく」を見よ。

○ひさし 庇 つま 堀川院御時百首、河内「けふことひさしにふけるあやめ草たゞかりそめのつまとそみれ」

○ひさまづく 跪 古事記、高津宮殿に「跪三于庭中」時、雄略紀に「跪禮」などあれば、是も古語なりし也。膝を突て屈まり居るにて、敬ふさまなり。空穂物語、只こそ「たゞ君のおり給ふ所に、五位六位、ひさまづきかしこまる」

○ひさよりしも 膝以下 實方朝臣集「あし

のかみひざよりしものさゆなるはこしのわたりに雪やふるらん」

○ひざをいだく 膝を抱く 新撰六帖、信貴樂「かけまくもかしこき法のひじりとやかたじけないくよあかしつ」白氏文集、十「雨夜有念詩膝殘燈前」

○ひざをまじふ 膝を交ふ 散木六、聖衆俱會にせん人もはらはぬ夏の池のひしとも物のおもひとられぬ」葱にひしのびね上「今かくひしぐ」とおぼさるべきこととは思はざりしを」撰集抄五廿二「ひしとげにおもひさだめて侍り」愚管抄三「ひしとあらはかされたるにて侍る也」同「ひしとくにをさまり」同「道理をひしと心得るうへに」同五「八條の堂にて榜にかけてひしぐととひければ、皆落にけり」讃岐日記「そちらの、しりつるくしうさどもひしとやみぬ」

○ひじき 鹿尾菜 和名抄云「鹿尾菜。辨色

立成云。六味菜比湊木毛」とあれば、是を訛れるやうなれど、伊勢物語に「ひじきものには、袖をしつゝも」とよみたれば、比自岐毛の省れる也。

○ひしぐ 挫 われなくだく 割碎 夫木抄、卅一、雜、民部卿爲家「山がつのへだてにひしぐ竹垣のわれくだけてもよをやすぎまし」

○ひしと ひつしと 韶 (ひし 稲密參照) ひしとこまる。ひしとさしつかへた。などいふ。歌にも見えたり。拾玉集四、法樂百首日吉「いかにせん人もはらはぬ夏の池のひしとも物の思ひとられぬ」これは菱にいひかけたり。此程も平語なりけん故に打まかせてはよみにくくて兼用したるなるべし。又此詞をひつしともいひて、必死などの字をかけども、其意にはあらで、右のひしとといふ語の音便なるべき歟。

○ひしく 「ひし」を見よ。

○ひしく 中昔には、これをみしくといへり。大鏡二、太政大臣忠平貞信「此三人の大臣たちのまゐらせ給ふ料に、小一條の南かどの小路には、石疊をぞせられたりしが、まだ侍るぞかし。むなかた

の明神おはしませば、洞院うしろのつちより下させ給ひしに、雨などのふるひの料とぞ承りし。大かたその一町は、人まかりあるかざりき。今は、あやしき者も馬車に乗て、みしくとあるき侍るとよ。昔の習ひに、いとかたじけなくこそ見給へき」

○ひしほす 醬酢 あつもの 煮物 葉集、十六丁十八に「^{ヒシホスニ} 醬酢爾蒜都伎合而鰯願吾爾勿所見水葱乃煮物」今案に、醤酢は今世の味噌と云もの、古名なるべし。酢とは、只そへたる言にて、今世に煮物に用ふ時の酒を酒鹽といへる鹽と同じ心ばへなり。

○ひじやうのこと 非常事 死を云ふ。葵花物語、月宴に「その、みや非常の事もおはしまさば」

○びしやかき 榆 榆をびしやかき。といふは、實榮樹を訛れる也。和名抄に「^{ヒシヤカキ} 榆漢語抄比佐加木」とある比も美の通音也。今も國によりては、みさかきともいひ、北國にては、さか木といひて、神事の賢木に用ふといへり。其木の形圓かに叢り繁りて、紫色の黒ばみたる實を結べるも美はしければ、上古賢木の種類たる中にも、殊に主と用ひしにや。

古事記の歌には、伊知佐加紀とあり。最榮樹の義也。

○ひしやく 比佐古 しやく 柄杓 瓢は、和名抄に「瓢瓠也。匏也。可爲飲器者也」和名「奈利比佐古」また「杓掛」水器也。和名比佐古と見ゆ。延喜式、鎮火祭祝詞に「水神匏壇山姫川菜乎持氏」神代紀一書に「云々。又生三天吉葛天吉葛此云阿摩能與佐圖羅」一云與曾豆羅」神樂採物歌、杓「おは原やせかわの水をひさごもて鳥はなくともあそびてをくめ」など見ゆ。古事記傳云「比佐古は本瓠の名なりしが、水を斟器に作るに依て、其器の名にもなりて、木もて作れる杓をも同く比佐古と云から、瓠をば、那理比佐古と云か。那理比佐古と云は、蔓になる故の名なり今世に、ひしやくと云は、ひさごの訛なり。又しやく、とのみ云も、ひしやくの略也。杓字の音にはあらず」とあり。

○びそ 「はな」を見よ。

○ひそく なく すはやり そはり 和名抄、造作具「檜楚」漢語抄云「檜楚比曾俗檜曾二字」下學集下「檜楚」日本俗。呼細木曰檜楚。楚作曾非也」

○ひそむ 繩 源氏物語、少女「宮もうちひそみ給ひぬ」^{ペソチックルト云}同、東屋「たゞひそみにひそむ」同、角總「姫君の御ころをあやしくひがくしくもてなし給ふをもどきにひそめ聞ゆ」^コハ俗ニ云フツボクチヲシテ心ノウチニモトキ思フ時イフサマナリ)

○ひたかし 日高し 曾根好忠集、六月終「妹と我ねやのかさとにひるねして日たかき夏のかけを過さむ」

づといひて、肥立の俗字を填たるは「日足」の訛れるな
るべし。古事記中に「日足奉」書紀私記に「云比太
須其義如何。答師說凡人子。初生日數最少。而漸々
長養。日數最稍足。故謂養長其子爲日足耳」と
ある是也。但し日足字も、もしは假字にて「太足ゆく
よし歟とおもふ事あり。

○ひたひ 蔽髮 某額 和名抄「蔽髮比太飛
蔽髮前爲飾」新古今、雜下「后にたち給ひける時

冷泉院の后宮の御ひたひを奉り給うけるを、出家の
時かへし奉り給とて東三條院、續世繼、梅の木のもの
に、あつひたひのかぶり、すきびたひのかぶりの事み
ゆ。空穂津白波「今一にはおほんくしのてうど、すゑ
ひたひよりはじめ、さいしもとゆひ、おほんくしど
もなど」和名抄、假髮須惠「猶「かたねぶり」を參照
せよ。」

○ひたひえはし 額烏帽子 夫木集、卅二、
雜、西行「しのためすゝめ弓はるをのわらはひた
ひゑはしのはしげなるかな」

○ひたひつきたる出居 「でゐ」を見よ。

○ひたひのはながた 額花形附梅花粧 大鏡

五「閑院大將殿は、後にはこの君達の母をば去て、
枇杷大納言のぶみつの卿うせ給ひし後、そのうへの
年老て、かたちなどわろくおはしけるにや、殊なる
事聞え給はざりしを住給ひし云々。この北方は色黒
くて額に花がた打つきて、髪ちうけたるにぞおはしける」此花がたといへるは、今の世に、雁金ひたひ
といふ類にて、剃入たるさまの、花の形に似たるを
云へるなるべし。西土の書に漢の時に、梅花粧とい
へる事有も、又同じ類と聞ゆ。新宋書「武帝女、壽
陽公主。人日臥於含章簷下。梅花落于額上。成五出
之花。拂之不去。自後有梅花粧」初學說「宋武帝女、
壽陽公主。人日臥簷下。梅花落于額上。成五出之花。號
爲梅花粧」

○美女は必髮長し 大鏡、三、左大臣師尹「御
むすめ、村上の御時の宣耀殿の女御、御かたちをか
しげにうつくしうおはしけり。内へ參り給ふとて御
車に奉り給ひければ、我御身はのり給ひけれど、御
ぐしのそそは、もやの程のもとにぞおはしたる。一
筋をみちのく紙に置たるに、いかにも筋見え給はず
とぞ申傳へたある」同、七「さては此のゝしる無量
此語也。

○ひつぎ 棺 棺を比都伎と言ふは、人城に
て、城は奥城の城に同じ。
○ひつぎやう 畢竟 維摩經六觀衆生品七「行
不壞慈、畢竟盡故」

○ひつしど 「ひしど」を見よ。

○ひつじのあゆみ 羊歩 源氏物語、浮舟「ひ
つじのあゆみよりもほどなきこゝちす」河海抄の注

に「歩々近死地。人命亦是經文」摩耶經云「譬梅陀羅
飼牛至屠所。歩々近死地。人命亦是」千載集、詳説、
赤染衛門「けふも又牛の貝こそふきくなれひつじの
あゆみちかづきぬらん」夫木抄十九、雜、顯昭「み
にすぎてむまことものはかなしけれこひやひつじの
あゆみなるらん」新撰六帖、一、光俊朝臣「もえつ

壽院には、幾度參りて拜み奉り給ひつといへば
云々、物覺えて後さる事をこそまだ見侍らね。御手
車に四所奉りしぞかし。口には大宮皇太后宮、御
袖ばかりをいさゝか差いでさせ給ひて侍りしに、枇
杷殿の宮の御ぐしの地にいと長く引かれさせ給ひて
出させ給へりしそいとめづらか成し事かな」同、七
「大宮の御ぐし、御衣のすそにあらませ給へりし。中
宮は、御だけにすこしあまらせ給ふにや。御扇をい
どちかくさしかくしておはします。皇太后宮は、御
ぞの据に、一尺あまらせ給へる御すそ、扇のやうに
て、かんの殿御だけに七八寸あまらせ給へり」此外
吉野の座王權現に納めたる光明皇后の御髪一丈二尺
静女か切りて納めたる髪八尺あまりありといへり。
今世には、さばかりなる髪をたえて聞ざるはいかな
る事にかあらん。

○ひづ 櫃 はかみ 外居 からひつ
韓櫃 實方朝臣集「このひつはなにぞのひつぞ
おばつかなかたねのまへのはかみなりけり」竹取物
語「からひつのふたに入られ給ふべくもあらず」

○ひづ ひで 浸 土佐日記二月四日「手
外居 からひつ
はかみ 櫃 韓櫃 實方朝臣集「このひつはなにぞのひつぞ
おばつかなかたねのまへのはかみなりけり」竹取物
語「からひつのふたに入られ給ふべくもあらず」

やくかうのけぶりの時うつりひつじのあゆみけふも
はどなし」

○ひつじのあゆみひまゆくこま 羊歩過隙駒

抱朴子云「人在三人間一日失二日如牽牛以詣屠所毎進一步而去死轉近」中務内侍日記云「いたづらにあかしくらす春秋はたゞひつじのあゆみなるこへちしてすゑのつゆもとのしづくに、おくれさきだつためしのはかなきよをおもひながらとくだつのえんにはすます」撰集抄云「屠所のひつじのあゆみわが身のほかにもてはなれて」と

あり新後拾遺集、佐阿上人歌「ついにゆく道も今はのときなれやひつじのあゆみ身にぞちかづく」禮記云「若驅之過隙」東坡詩「開眼三十春速於駒過隙」新勅撰集源有房「ほどもなくひまゆくこまを見てもなほあれひつじのあゆみをぞ思ふ」(前出、ひつじのあゆみ参照)

○ひつばく 法華經一、方便品二頌「受胎之微形。世々常增長。薄德少福人。衆苦所通迫入邪見稠林」

○ひと仁 人を仁といふも古き時よりの事也。本朝文粹、大江匡衡の文に「臣謬當其仁」聊記盛

事」と見えたり。

○ひと 一某 今世の言に、一村舉て、一里

の騒ぎなどいふめる一は古きいひさま也。古事記詞志比宮段に、殿ノ皇入鹿魚既依ニ一浦ニ云々傳云。

一浦とは、浦に満たるを云。云意なり浦とあり。神

代紀に盛ニ一箕」とあるも、箕に充满たるを云なり。

空穂物語に「いかき者ども一山にみちて」大和物語に「一寺求めされど更に逃て亡にけり」(寺は寺のくな源氏物語須磨に「一宮のうち忍びて泣あへり」蜻蛉日記に「一京などもあり「涙を一目浮て」とある

も目に満るを云り。

○ひとあさり 夫木抄、十七、冬、前民部卿雅有「いづくへとおきつこじまのひとあさりはねもやすめず立千鳥かな」

○ひとあたり 夫木抄、廿、雜、慈鎮和尚「風ふけばたかしの山のしらなみにひとあたりしてたれかこゆらん」

○ひとがら 人柄 伊勢物語に「むかし、きのありつねといふ人ありけり云々。時うつりにけれどよのつねの人のごともあらず、人がらは、心うつくしうあとはかなきことをこのみて」

○ひとときは 一際 拾玉集四、釋教仙部「今は上る光りもあらじもち月とかぎりになればひとときはの空」

○ひとくき 一莖 夫木抄十四、秋、從三位爲實「たねしあればこけばかりなる岩がねにひとくささける白菊の花」

○ひとくだり 一莖 おちくば物語、一之下「ふみ、いくだりやりつるが云々」

○ひとくだりのふみ 一條文 空穂物語、俊蔭「ざえあるをのこども手まとひをして、いくだりのふみをも奉らぬに」

○ひとくちにくふ 一口に食ふ いせ物語に「あばらなるくらに、女をばおくにおし入て云々、おにはひとくちにくひてけり。あなやといひけれど、神なるさわぎに、えきかざりけり」

○ひとくるしめ 人苦しめ 堀川院御時百首

○ひといろ 一色 夫木抄十二、秋、後鳥羽院御製「山ざとの門田のいなば風越てひといろならぬなみぞたちける」

○ひとかた 一方 (二方) 幾所 御兩所

○ひと柱 貴人を指して御一方、御二方などいひて、貴女の稱を某御方などもいへり。こを中古の歌物語などには、幾所といへれば、方も所の意より轉れる

なるべし。此所を字音して今も御兩所様などもいへり。稱德紀の宣命に、二所の天皇とあれば古き時よりの稱と見ゆ。即、大宮所などの所と同じくして

後世は、音讀して御所とも兩御所などもいへる也。此類を上つ代には、幾柱といひき。古事記上卷に「此

三柱神者云々」「上件五柱神者云々」また「一柱天皇」又「二柱王」などあまた見ゆ。三代實錄「清和天皇の詔に「太政大臣一柱」とあり。

○ひとがた 人形 釋日本紀「人形者所謂素盞鳴尊之靈觴。拔手足之爪贖其罪身代之義也」

○ひとかたならず 繢詞花、藤原爲親、一方ならず「身のうさも人のつらさをおもふにもひとかたならずねる」をでかな」

○ひとくちにくふ 一口に食ふ いせ物語に「あばらなるくらに、女をばおくにおし入て云々、おにはひとくちにくひてけり。あなやといひけれど、神なるさわぎに、えきかざりけり」

權中納言國信「ことしもなかではやまじものゆゑに人くるしめのほとゝざす哉」

○ひとさき　夫木抄、一、春、平兼盛「あし曳の山かたづける家ゐには先人さきに若なをぞつむ」

○ひとしぐれ　一時雨　夫木抄、十六、冬、

源仲正「梢よりひと時雨して過ぬなりしづえのもみちぬれもはてぬに」

○ひとしほ　「しほり」を見よ。

○ひとしめり　一濕　夫木抄、九、夏、參議爲相卿「ゆふたちの名残の庭の一しめりすゞしくなれむ淺ちふのいろ」

○ひとだね　人種　おちくば物語、一之下「人だねのたえたるぞかし云々」

○ひとたはぶれ　人々集りていろ／＼の遊びして物をかけものして、戯ぶるゝをいふか。續詞花「戯咲、人たはぶれをしてかたみにのりなどして」

○ひとだま　人魂　萬葉集十六「三十怕物歌」人魂乃佐青有公之但獨相有之雨夜葉左非思久所念此歌初句を枕詞と云説は、わろし。人魂を怕しき物と

してよめるにて、「公とは人魂を指ていへる詞なり。又結句今本非左思とあるは、左非思を上下に誤り、久字を落せるにて、さびしくおもふといふ也。更級日記「この曉に、いみじくおほきなる人だまのたちて、京ざまへなんきぬるとかたれど、供の人などの有こそはとおもふ」

○ひとつがひ　一番　夫木抄、十七、冬、長明「とほつかはいはまのをしのひとつがひさてしますまばやまふかくとも」

○ひとつくうしをばつのをきる　人突く牛をば角をきる　野槌に律厩牧を引て云。畜産舎人者截三兩角。

○ひとつくち　落くば物語、四廿五「おもしろの駒とひとつくちにいふべきにあらす」

○ひとつご　萬葉集「ヒトツゴフタツゴモタリトイヘ」伊勢物語に「ひとつ子にさへありければ」空穂物語、只こそ「その北方ならびなきよのたからの王なり。はじめより、のちまでいさゝか立ならぶ人なくて、ひとつごにいますかりけり」

○ひとつれ　一連　新撰六帖一、正三位知家

「關こえてくるればかへる大津馬のおのが一つれみちいそぐべし」夫木抄十二、秋、參議爲相卿「一つれはすそのに出てをぐら山みねにものこる棹じかのこゑ」

○ひとなか　人中　源氏物語、松風「まばゆきひとなか」とはしたなく」

○ひとなげかせ　人歎かせ　萬代集、戀二、權中納言師俊「つれなさのためしはたれぞたれにても人なげかせのはてはよしやは」

○ひとなみ　人並　萬葉集、五、三十「人なみに我もつくるを」空穂物語、祭使一「みなみにましかざつるかなかつら川けふ人、みなみのこゝちのみして」源氏物語、帝木、馬頭詞「ひとなみ／＼にもならば」金葉集、雜部上、前中宮甲斐「人なみに心ばかりはたちそひてさそはぬわかのうらみをぞする」

夫木抄、六、天永四年閏三日顯輔卿家歌合、藤原重之「玉の井の汀にさける山ぶきを人なみ／＼にけふ見つるかな」

○ひとになる　成人　文選云「成レ人不_ニ自在」自在不_レ成_ニ人」性理大全云「朱子曰。聖人千言萬語

只是要_レ教ニ人_{ヲシテナラハニ}人_ヲ做_ラ人_ヲ古歌に「人となり人とならばやとぞおもふさらすばつひにすみぞめのそで」

○ひとの　一幅　堀川院百首に「ぬぎかけしぬじはたれともしらねどもひとのにたてる藤ばかまかな」野に一幅をかねたり。

○ひとのかぐみ　人の鑑　晉書樂廣傳云「衛灌曰此人之水鏡也」

○ひとのくち　人口　夫木抄、廿七、雜、後京極攝政「世の中のとらおほかみはなにならず人のくちこそ猶まさりけれ」

性靈集「諺云、奴口甘_{ニキシ}郎舌_ヲ甜_シ」

○ひとのくちにうまければわくちにもうまし一、十六、人口にのりて申すめり」

○ひとのなさけはよにあるとき　人の情は世にあき今までのともぞなき人のなさけは世にありしはる時　菅家御集、友といふ題にて「あはれ我うど」唐詩選。貧交行、杜甫「糲_レ手作_レ雲瘦_レ手雨_ヲ。紛々輕薄何須_レ數。君不_レ見管飽貧時交。此道今人棄如

士

○ひとのふちせ　人の淵瀬　拾遺集、雜、戀
「ゆくみづのあわならばこそきえかへり人のふちせ
をながれてもみめ」

○ひとはなれ　人離　新撰六帖、三、信實朝
臣「あきさる淺澤小野の人はなれさびしくとほき
みづの聲かな」

○ひとびとおんちゆう　人々御中　園太曆延
文四年十一月條に「書狀のおくに、進上二條殿人々御
中」と見ゆ。又其他にも、あて名はなくて、たゞ人々御中とのみあるもあり。

○ひとまね　人真似　古今集、詳説「さかし
らに夏は人まねさゝのはのさやぐ霜夜をわがひとり
ぬる」

○ひとむかし　一道、一途　萬葉十二七「ひだ
人のうつ墨繩のたゞ一道に」

○ひとむかし　一昔　山家集、下、卅六、は
かま「書寫へ参るとして、野中の清水をみける事、一む
かしになりにける」新撰六帖、橘信實「ふる郷の
花たちばなの枝ぶりにかたみおはかる一むかしか
な」

○ひとめ　一目　萬葉集六十九丁「一目見し
人のまよびき」十六十二丁「一目見し人に戀らく」
十一六丁「又一目みん」此外、十五十九丁、十一三
十二丁、又十九丁、十二二十六丁、十七二十五丁、
十八十六丁等に出て、いと多き詞也。

○ひともじ　ねぎ　ねぶか　わけぎ
「あさつき」　董菜の類に、古くは蒜、大蒜、
小蒜、薤、韭など和名抄にもあれど、今世に、ひ
ともじ、ねぎ、わけぎ、かれぎなどいふものは、
皆葱の種類にて、蒜、韭の類とは、異なり。それに
付て考あり。先葱は、穀物なれば、あてなる人は
少し人目を厭ふかたの有けん故に、葉漬を、はもじ
莖をくもじなどいふ例にて、一もじとはいひそめ
たるか。葱と一文字のよし也。さて其葱は、白根を
愛るものなれば、江戸には根葱といひ、又其根は長
くて深く土に入るものなれば、京にて根深といふ。
又其葱の長じて頂きに寶珠形の實のなるを以て、葱
寶珠の模範とせるなり。然るに近年は此葱に又一種
細き物出来たるを、わけぎといふも、もとの名によ
れる也。其中にあさつきは、古よりある物にて、野

蒜の種類也。和名抄十七「董菜類。楊氏漢語抄云。

島蒜阿佐本朝式文用之

豆木

夜酒

いまの甘酒なり。和

名抄「醴古佐介一日宿酒也」

正治二年百首、小侍從「くれぬと

もはづとやだしのはし鷹を一よりいかゝあはせざる
べき」

○ひとり　火取　元良親王御集『女宮ゑじて

よせ奉らざりける比四宮より「身をつみて思ひしり
にきたきものゝひとりねいかにわびしかるらん」

○ひとりさめたり　獨醒めたり　夫木抄、十

五、秋、清輔朝臣「もみちするおなじみ山の木すゑ

にてひとりさめたるいはね松かな」同、權信正公朝
「たれならむしぐれにあける秋山にひとりさめたる

松のみどりは」同、民部卿爲家「もみちこそときは
のいろとなりにけれひとりさめたる松もしぐれて」

同、藤原伊行「もみちばはくれなるふかくなりゆく
をひとりさめたる松のいろかな」

○ひとりむすめ　一人娘　空穂物語、藤原の
君「時の太政大臣のひとりむすめに、御かうぶりし

給ふ夜、むことりて限りなくいたはりて、すませ奉
り給ふほどに」

○ひとをさそふ　人を誘ふ　夫木抄、一、春
寂連法師「雛子なく春のやけのゝ若なゆゑねたくも
人をさそはざりけり」

○ひとをのろはばあなふたつ　人を咀は穴二つ
雜寶藏經「雪山有鳥。一身二頭。一頭得美果。一睡食
之。睡者覺香曰。汝食美果。何不相讓。曰爾自睡來睡頭
妬之。候彼睡以食其毒果。二俱死也。即佛與天受因也」

法華經普門品云「咒詛諸毒藥所欲害身者。念彼觀音
力。還着於本人」楞嚴錄云「東坡居士曰。觀音慈悲
者也。今人遭咒。則觀音之力。而使還着於本人。則豈觀音之心哉。今改之曰。咒詛諸毒藥所欲害身
者。念彼觀音力。兩家總沒事」古歌に「あしかれと人
をばいはじ難波がたわが身のとがにかへるしらな
み」伊勢物語「つみもなき人をうけへばわすれぐさ
おのが上にぞおふといふなる」

○ひとをのろうてひとがたにはりをうつこと　人
を咀うて人形に針をうつ事　日次記、六十八、
久壽二年八月廿七日壬の條曰「觀隆朝臣來語曰。所

以法皇惡禪閣及殿下。余者先帝崩後人寄帝巫口。

巫曰。先年人爲詛朕。針打愛宕山天公像目。故朕目不明。遂以退世。法皇聞命其事使人見一件像。既有其針。即愛宕護山住僧問之。仰申曰。五六年前有夜中下說文。

○ひながた 「ひなあそび」を見よ。

○ひなた 日向 夫木抄、廿、雜、相摸さしてこしひなたの山をたのむ身はめもあさらにとみえざらめやは」

○ひなたばかり 日向誇 古本今昔、十九、

八丁「日ウラ、カニテ日ナタ誇モセム」永正五年正月二日、狂歌合「今朝てらす日なたばかりに貧乏の神代の春や立かへるらん」

○びなん 美男 徒然草九十九段に「堀河の

相國は美男のたのしき人にて、其事となく過差をのみ給ひけり云々」注に、美麗を樂しくする義也とあり、然れば、今云美男にはあらざる也。

○ひね 古稻 陳 新穀に對へて古稻をひねといふ。萬葉十六二十に「あらき田のし、田の稻を倉につみて阿奈干稻干稻志わか戀らくは」即此處の

如く干稻の義也。

○ひねりぶみ 拙書 空穗物語、祭使「日に

一たびたんざくをいだして、ひとけのいひをくふ。ゐんしかいとり、とうゑいが口のひねりぶみとわらはれ云々」

○ひのあめ 火雨 世語に「火の雨が降る」といふことのあるは、水雨と、佛家の俗書に、劍の山を越て火の雨を七日凌ぐといへる中古の云習はしとの混紛れ弘まりたるなるべし。冰雨は、古事記日代宮段に「於是零ニ大冰雨打惑倭建命」遠飛鳥宮段にも「零ニ大冰雨」とあり。和名抄に「文字集略云。霧大雨也」日本紀私記云「火雨、和名比左女雨水同上。今按。俗云比布留」と見え、書紀に、大雨甚雨、淫雨などみなひさめと訓めり。推古紀。天智紀などに、火雨とあるは、大雨とありけんを後人訓に牽れて誤れるなり。天武紀に「冰零大如三挑子」とある水零も古き訓には、ヒサメフル、とあり。是にて、比佐米は、雹の零を云ことを知べし。さて後には准へて大雨をもいふ名となれるにこそ。

○ひのきえたやう 火の消えた様 築花物語

月宴丁九「たゞおやとも君とも、みやをこそたのみ申つるに、ひをけちたるやうなるを」源氏物語、若菜

下「このゐんには火をけちたるやうにて、たゞ女どちらおはして」讀岐日記「火をうちけちたるとは、是をいふべきにやとおはえて」源氏物語、匂宮「世はたゞ火をけちたるやうに、何事もはえなきなげきをせぬをりながらけり」法華經「佛此夜滅度。如薪盡火滅」

○ひのくれ 日暮 夫木抄、十二、秋、從二位行家卿「日のくれにいはたのをのをゆきしかばさをじかなきつ妻をこぶらん」

○ひのへむまのをんなはをとこをころす 丙午の女は男を殺す

此説和漢の書に據なし。近ごろ好事の鑒説に、丙午の女を娶るをいむ故は、丙は陽

火なり。午は南方の火なり。火に火をくはぶる故に

あしといへり。およそ人の壽命は、皆命なり。妻が性によつて、夫みだりに死せんや。

○ひのもとのぶしはなををしむ 義經記に、土佐昌俊、義經に向て云けることばに「猖々は血ををしみ、犀は角ををしみ、ををしむ

日本武士は名ををしむと

○ひのめもみぬ 日の目も見ぬ 月の顔

俗に、空のいたく疊りたるを、日のめも見ぬといふも古語なり。萬葉集、第二「日のめも見せずとこやみに」とよめり。日の目とは、日のかほといはんが如し。竹取物語に「月のかほ見るはいむ事」といへり。源氏物語、須磨卷に「月のかほのみまもられ給ふ」といへり。

○ひはだづき 檜皮葺 空穗物語、藤原君「四町の所をよつにわかちて、町ひとつに、ひはだのおくたてたる」

○ひはづ 「ひはづ」を見よ。

○ひはつく ひはつく ひがいす ひはづ

古事記中卷、倭建命御歌に「比佐迦多能。阿米能迦細なり。比波は源氏物語、真木柱に「いとさゝやかなる人の、常の御なやみに、瘦衰へ、ひはづにて」

云々。又柏木に「宮はさばかり、ひはづなる御さまにて」云々。又竹川に「源侍從とて、いと若うひはづなりと見しは云々」。築花物語音樂に「宮いみじくひはやかにめでたうて入せ給ふ」などある。比波豆比波夜加など、一言にて、細く、たをやかなることなり。今世言に、物の細く弱くて橈む貌を、比波々々とも、比波都久とも云是なり。されば、此上の詞どもは、細く比波夜加なる意の序にして、此歌は、美夜受比賣の腕の、細くたをやかなるを詠へる也。已傳とあり。凡ては此釋の如し。猶おもふに、東國にて、ひはづに瘦みたる小兒などを、ひがいす、と云も、此弱細を急語に唱へ頽せる詞なるべし。

○ひゝ 賽 ひゝわれ 小婢をひゝといふは物の響より出たる語なるべし。土器の小環をひゝが入といふも響の入たる也。即ひゝ割ともいへり。和名抄に疹は「説文云。疹徒冬反。訓比々良久。動痛也」とある是其意也。神武御製に「宇惠志波士加美久知比々久。和禮波和須禮士宇知豆斯夜麻牟」契冲云「薺を食へば、辛味の氣の、後までのこりて口中の疼くを、慷慨の残りて忘れ給はぬに譬へさせ給

云々。又柏木に「宮はさばかり、ひはづなる御さまにて」云々。又竹川に「源侍從とて、いと若うひはづなりと見しは云々」。築花物語音樂に「宮いみじくひはやかにめでたうて入せ給ふ」などある。比波豆比波夜加など、一言にて、細く、たをやかなることなり。今世言に、物の細く弱くて橈む貌を、比波々々とも、比波都久とも云是なり。されば、此上の詞どもは、細く比波夜加なる意の序にして、此歌は、美夜受比賣の腕の、細くたをやかなるを詠へる也。已傳とあり。凡ては此釋の如し。猶おもふに、東國にて、ひはづに瘦みたる小兒などを、ひがいす、と云も、此弱細を急語に唱へ頽せる詞なるべし。

○ひゝがい 物の少く割筋の附をひゝかいると云は、胼と同意の言なるべし。又響、疹なども言のうへは猶同じすぢがらなるべし。胼胝の字をひゝあかがり、とよめり。此胝を萬葉集の歌には、加々流とよみたり。腫字をよめり。
○ひゝかせる 堀川院御時百首、權中納言國信「わきかへる岩こす波のたかれれば山ひゝかせる鈴香川かな」
○びゝしく 美々しく 蜻蛉日記、下八「いとをかしうて、歸る雁を、なかせてなど答へたれば、いとはがらかに、うちわらふ。さてかのびゝしうもてなすとありし事を思ひて、いとまめやかに心ひと

つにも侍らす」枕冊子、はしたなきものゝ條「ひゝしくもいひたつる哉」
○ひゝな 雛 中務集「中宮のひゝなあはせに、かはらのかたすはまにつくり、ひゝなのくるま」なぬか「たなばたもけふはあふせときくものをかはとばかりや見てかへりなん」れいけいでんの女御中宮に奉れ給ふひゝなものに、あしでにて「しら波にそひてぞ秋は立ぬらしみぎはのあしもそよといはん」とあり。是は洲濱に雛人形をしするて雛合に出されしなるべし。齋宮女御は、寛和元年五十歳にてうせ給へり。中務は天元中源順ぬしと同時の女也。されば、天元寛和の前、ひなあそびの有しは明けし。齋宮女御の御年をもて、おしあてにおもふに、天暦の比は、はやく雛遊の事有りしなるべし。枕草子、うつくしき物「ひゝなのてうど」源氏物語、紅葉賀「ひゝなあそび」同、野分「ひゝなのとののは、いかでおはすらん」

○ひゝなあそび 雛祭 ひながた 雛形
齋宮女御集に「うちにおはせし時、ひゝなあそびに、神の御もとにまづる女に、をとこまであひて、物

いひかはす「そのかみはさしも思はでこしかども思ふことこことなりぬれ」女のかへし「かみよ、りおもふことだに有物をあたらおもひにいかがなるらん」おなじひな社の前の河に紅葉ちる所にて「風さへや神のあたりをはらふらんはやきせりにもちるもみぢばを」是雛あそびの物に見えたるはじめとす。是より後の物語どもには、いと多く出たれど此集より以前には、いまだ見あたらず。名義は、鳥々那、台記久壽六年條に、比々鳴の義也。かなは江家次第に比々那、台記久壽六年條に、比々奈遊と書給へるにて證すべし。玉勝間十に、ひるなとせられたるは、ひが事也。小人形をしも此名もてよぶは、凡て小物を雛といふによりうつれる也。今も小作る物を雛形といふが如し。民間の家々に、是を祭る事、いつよりとは定かにしられざれど、或説に、三月上巳の禊事に流し棄し貴人の雛形を下流にて拾ひあげて祭りそめたるが起なり。かれ、今の雛のはじめは、紙雛より興れりといへり。さる事にもやあらん。いかにもせよ内裏雛とて、上檀にうやしく祭り奉るは、かけまくも畏きおすぐたなるを、民の家々に祭

へる也」といへる、此ひゝくも同じ。

○びく 比丘 びくに 比丘尼 世俗に

はこれをひとつに心得をれば出せる也。新譯仁王護國般若波羅密多經卷上「比丘」希麟音義五「比丘」梵語不正也。應云。苾芻。此云怖魔一。乞士二。淨命三。

淨戒四。破惡五。具此五義。故存梵語不譯也。比丘尼義如前。尼卽女聲」聽雨紀談「釋氏稱比丘比丘尼。皆

胃吾先聖名乎」

○ひゝがい 物の少く割筋の附をひゝかいると云は、胼と同意の言なるべし。又響、疹なども言のうへは猶同じすぢがらなるべし。胼胝の字をひゝあかがり、とよめり。此胝を萬葉集の歌には、加々流とよみたり。腫字をよめり。
○ひゝかせる 堀川院御時百首、權中納言國信「わきかへる岩こす波のたかれれば山ひゝかせる鈴香川かな」
○びゝしく 美々しく 蜻蛉日記、下八「いとをかしうて、歸る雁を、なかせてなど答へたれば、いとはがらかに、うちわらふ。さてかのびゝしうもてなすとありし事を思ひて、いとまめやかに心ひと

る事となりつるは、はからず、天皇をいつき貴ぶ本
つ神國の本義に立かへりける心ちして、いともく
あらまほしく、貴きならはしの起りつるなりけり。

猶此うへは難の上のみならで、まことに天の下おし
なべて、しか貴み奉れかしとぞおはゆる。

○ひらぎをさすこと 格を刺す事 土佐日記

「正月元日、けふはみやこにのみぞおもひやる。九
重の門のしりくめなは、なよしのかしら、ひらぎ
らいかにとぞいひあへる」

○ひる 蛾 字鏡に「蛾蠻也蛾也。安利比
々留」と見え、和名抄に「說文云、蛾蠻化飛虫也。也。

和名比々流」と見えたり。

○ひませ 隔日 十六夜日記「やよひのするつ
かたわかくしきわらはやみにや日ませにおくる事
二たびになりぬ」茶花物語、浦々の別「ひませなど
の御つかひ」

○ひわれ 「ひ」を見よ。

○ひまはし 火廻 わらはべの戯れに、火ま
はしといふことをする、堀川百首、權中納言國信「み
どり子のあそぶすさびにまはす火のむなし世をば

ありとたのまじ」「ひつじのあゆみを見よ。

○ひまゆくこま 「火水にいる」

萬葉集、四十五
「わがせこはものなおもほし事あらば火にも水に
もわれなげなくに」九三十一「入水火爾毛將入跡立向

競時爾」

○ひめ 偏棕 和名抄。水漿類「偏棕、唐韻
云。編棕和名比女。或說云。煮米多水者也」枕冊子、

とりどころなき物「みぞひめのねれたる」御衣偏棕也。
云。常磐媛物語「白米がなひめにして湯をものまば
やな」

○ひめぐるひ 姫狂 下總國久流理鄉人來て
談しけるに、遊里にあそぶ事を姫ぐるひするとい
へり。やさしき詞なり。崇神紀の歌に「瀬磨紀異利

麻胡播榔、飮迺餓鳩鳥、志齊務苦、農殊末句志羅珥、
比賣那素麻望一云於朋耆妬庸利、于介伽早氏、許

呂佐務苦、湊羅句鳩志羅珥、比賣那素麻湊望」ひめ
なそびは、姫之遊にて、媛狂と云にや、相似たる詞

也。

○ひめごせ 姫御前 宇治拾遺、三十三「その

「今、品藻爲三題目」「初勵與靖俱有高名。好共聚
論鄉黨人物。每月輒更其品題。故汝南俗。有月旦評
焉」

○ひやか 冷 ひやく 拾遺員外「うち
そぐ秋の急雨ひやかにて風にさきだつしたのうき
くも」しのびね物語上「御袖のいたくなれてひやく
としたる」活本水鏡中卷、推古「柴のひやかなるに
よりて夏になりぬればもろくの蛇まとひつけり」

○ひやくかにち 百箇日 園太曆云、延文三年
八月九日。天晴。傳聞。贈左府百箇日佛事。今日於
等持寺修之云々とあり。贈左府は尊氏卿也。

○ひやくざのはらひ 百座祓 白川顯廣王記
曰「長寛三年六月六日、今日百座祓」

○ひやくせんまんり 百千萬里 竹取物語「百
千萬里のはどういたりとも、いかでかるべきと思
ひて」

○ひやくとまるり 百度參 平戸記、延應二
年二月十一日條云「臨夜景密々參祇園。依恒例
之勤。率三人數有三百度詣事」云々。日次記、廿七、
久安三年三月十五日條曰「自賀茂送詩歎。各一首。

○ひやうばん 評判 品藻 月旦 後漢
書五十八、許劭傳「曹操微時。常卑辭厚禮求爲己
目。劭鄙其人而不肯對。操乃伺隙脅劭。不得
已曰。君清平之姦贼。亂世之英雄。操大悅而去」注

○拍子をとる 夫木抄、卅一、雜慈鎮和尚「庭
の松ことしこふなる風のおとにうちあはせてもどる
ひやうしかな」

○ひやうばん 評判 品藻 月旦 後漢
書五十八、許劭傳「曹操微時。常卑辭厚禮求爲己
目。劭鄙其人而不肯對。操乃伺隙脅劭。不得
已曰。君清平之姦贼。亂世之英雄。操大悅而去」注

其詞云。仲春拜賀茂一日。社壇企三百度之參詣云々

○ひやくなりびやう 百生瓢 四季談 四月
「秋の花垣百なりびやうのすゝきになりたるなど、
けしからぬ見ものなるに」

○ひやくにちのひでりにはあかねどいちにちのあめ
にはあく 百日の旱には飽かねど一日の雨には飽

く 田家五行曰「千日晴不厭。一日雨便厭」

○ひやくはつひやくちゆう 百發百中 史記
云「養由基去柳葉二百歩射之。百發百中」

○ひやくふくちや 百服茶 賢茶 十服茶 回茶
太平記 卷七 千劍破城軍事云「大將ノ

貢茶 下知ニ隨テ、軍勢ミナ軍ヲヤメケレバ、慰ム方ナカ
リケン。或ハ募、雙六ヲ打テ日ヲ過シ、或ハ百服茶

褒貶ノ歌合ナドヲ覗テ夜ヲ明ス」塵添埃囊抄、卷四
云「十服茶ノ法、茶三種ヲ以テ、各四服ヲ裏テ、各
一服ヲ取テ試トス。仍テ殘ル處三三九服也。不試茶
一種アル故ニ、是ヲ客ト云也。是ヲ三種試ト云也。
近來ハ茶三種ヲ以テ各三服ヲ裏テ客ヲ加フ。裏攻ト
モ云。无試茶トモ云也。最初ニ聞ヲ一ト定テ、札ヲ
不打。故ニ一種試トモ云也。是ヲ回茶ト云。回ハ顔

回ガ回也。聞「一知十故ニ云也。又貢茶ト云ハ子貢
ガ貢也。子貢ハ聞「一以テ知ニト云リ。以四種成十
服茶ナレバ、一種ヲ以テ三服ヲ裏ムヲ、聞一知二卽
いふこと葵花物語の、玉のかざりの巻に見えたる。
」

○ひやくまんべん 百萬遍 百萬遍の念佛と
いふこと葵花物語の、玉のかざりの巻に見えたる。

○ひより 日和 夫木抄 廿五雜 権信正公
朝「はりまちやそらは日よりになりぬともしばしは
いでじむろの泊を」夫木抄、卅六雜、好忠「花ぢり
し春の嵐ををしみおきて夏の日よりにふかせてしが
な」曾根好忠集、三月をはり「やす河の早頬にさせ
るのぼりやなげふの日よりにいくらつもれる」二月
をはり「はるくとうらへ烟立わたりあまのひよ
りにもしほやくかも」

○ひら 平 坪 篠 食器にお平
といふは、比良加の省れるなるべし。古事記上に「八
十鬼良迦」神武紀に「天平、八十枚」また「八十、平
金天之手扶」などあり和名抄に「盆、丸器也云々。比
良加。俗云保守岐」とあるこは今云盆にはあらず。

盆と金とは同物にて、今云皿の類なり。されば其形
今云平とも似たれば、平金よりいひ傳へたる名也。

食器におひらと云は、葉手にて、いは「葉盤」の平な
雀まりたるを云と出じ心ばへの詞、又おつぱと云は、葉椀の
いふは、笠形といへると同じ心ばへの詞也。江戸に
て其笠をおきせといふも、覆ひ着るよりいふ也。神

○ひよう 「ひやす」を見よ。

○ひよう 日備 ゆひ 堀川院御時百首、
阿闍梨隆源「残り田はそ代にすぎじあすはたゞひ
もやとは早苗とりてん」

○ひよどり 「かまびすし」を見よ。

月被ノ修作書

○ひやす 冷 ひゆ 空穂物語、祭使七「御

馬ども池にひきたて、ひやしまぐさかひなどする
に」六帖五、よみ人しらす「しほかせにけさひえに
けりなにはがたあし火たくやぞこひしかりける」拾
遺集雜下「老はて、雪の山をばいたりけどしもと見る
にぞ身はひえにける」

○ひやく 「ひやか」を見よ。

○ひやまのひはひよりいでてひをやく 檜山の火
は檜より出檜を焼く

沙石集に「自業自得果
のこゝろをよめるに、おく山の杉のむら立ともすれば
おのが身よりぞ火を出しける」又賴政集に歌林園
戀十首の中「おく山の杉のともすり我なれや我戀ゆ
るに身をこがすなり」是等は杉より火を出すよしに
よめり。

○ひゆ 「ひやす」を見よ。

○ひよう 日備 ゆひ 堀川院御時百首、
阿闍梨隆源「残り田はそ代にすぎじあすはたゞひ
もやとは早苗とりてん」

○ひよどり 「かまびすし」を見よ。

武紀に「作葉盤八枚盛、食饗之。葉盤此云^{ヒラタブネ}、鬼羅耐^{ヒラタブネ}」。大嘗祭式に「凡供神御雜物者云々。並居^{スケニ}葉枕^{クボナガ}」。久豆^{ヒラタブネ}以^{ヒラタブネ}笠形葉盤^{比良豆}。似笠形^{ヒラタブネ}以^{ヒラタブネ}木綿^{ヒラタブネ}結垂裝飭^{ヒラタブネ}。

○ひらいたじき 平板敷 中務日記 「御所のにしにひらいたじきに紫ベリしきて」

○ひらがる 宇治拾遺三、十三丁 「ひらがりをる云々」廣がりをる也。

○ひらたぶね 平舟 新撰字鏡に「艦船狹長也比良太」。和名抄云「船^{ヒラタ}。釋名云。艇薄^{ヒラタ}。長者曰^{ヒラタ}。船^{ヒラタ}。和名比良太。俗用^{ヒラタ}。平田舟」。とあり。今按に。其舟薄くして平めきたるよしの名なり。

○ひらゆたん 平油單 今衣服を包み持つ風呂敷といふ物を、西國にては、大小によらず、平油單といへり。拾遺家土産集といふ狂歌集に、俳人淡々が京師に居しに、行脚に出しを見立し人、辛崎の松の邊まで送りて淡々が空風呂敷ひとつ持て行く姿を見て送別に「みやこをば六枚肩で出しかど旅はめんふくひらゆたん」とあれば、畿内にても近年迄平油單の名ありし也。中昔の物に、ぞりく此名あり。されば、風呂敷といふは近き比の事なるか。

○ひろぶた 廣蓋 廣蓋といふ物、園太曆などに見えた。又白重の日記に「一品の禪尼の御局よりは、いときよげなるまきゑのひろぶたに、おり物のきぬ一領おきて」など見えた。此日記は姉小路中納言基綱卿の、延徳二年の御法會の事をしるされたるものなり。東鑑四十六「建長八年八月廿三日云々。卷緒三十疋。紺布三十。檀紙百帖。扇五十本。積廣蓋」同廿四「承久二年十二月一日^略後藤左衛門尉基綱持裝束納廣蓋」。盛衰記十。^{安德帝御降誕}「砂金千兩、南鎌百、御劍七振、廣蓋ニ入ヲ御衣二十領具セラレタル」

○ひわりご 榛破子 萬代集、賀「人のもと

に、おほわりごつかはすとて」月詣集「寄槍破子戀」

○火をおこす 堀川院御時百首、僧都永綠「鹿のふす小ぐらの山のやま人は火をともしてぞいるといふなる」

○ひをむし 曾根好忠集、序「我身ひとつはうれは」

○ひるね 畫寐 源氏物語、螢「何ごゝろもなくひるねし給へる云々」。狹衣一下十三^{ヒル}ひるねしたる。菊花、月宴「御あさいひるね」曾丹集「いもとわれねやのかさとにひるねして日たかき夏のかけをすぐさん」

○ひるはかやかれよるはなはなえ 螢は蒼刈れ夜は繩縄へ

詩云「畫爾子茅。宵爾索綯」

○ひろう 披露 明月記「寛喜三年七月廿二日云々、又落胤之童成人有不善物。雖疑當時秘而不披露云々」。後漢書五十蔡邕傳「以邕經學深奥。故密持稽問。宜披露失得。指陳政要勿有依違」。同七十四列女曹世叔妻傳「妾昭得以愚朽身當盛明。散不披露肝膽以效萬一」

○びろう 尾籠 後世これをびろうと音語によべども、もとは尾籠の假字なり。乎許の事は其條に出づ。されど此びろうの字もやゝ久しき事也。拾玉集五「志之所之申狀尾籠候哉恐惶謹言」

○ひろぐ 展 擴 竹取物語「御文そへてまるらす。ひろげて御らんじて」。同「はちの中に文有。ひろげてみれば」

○びん 髮 びんづら 古事記傳、美豆良注曰、崇峻紀に「古俗年少兒。年十五六間束髮於額。十七八間分爲角子。今亦然之」とある。此角子即美豆良なり。萬葉七^{八十}に角髮とあり。左右にあるが角の如くなる故に、かゝる稱は有なり。後世に髮類と云は、此美豆良を説れる言なり。江次第に「幼主之時垂髮頰」。おちくば物語一之下「御髮かきはて入給ふに云々」同一之下「え置あへてふところにさし入れて參りたり。御髮まゐらせ給はんとてなりけり云々」

○ひんそう 「ひやうばん」を見よ。前漢書七十四魏相傳「好觀漢故事。及便宜章奏」。同七十九馮奉世傳「世以衛侯便宜發兵誅莎車王」

○ひんのぬすみ 貧の盗み 鄭析子、無原篇「凡有民穿窬爲盜者。有詐譖相迷者。此皆生於不足。」

起於貧窮。而君必執法之誅之。此於民無厚也」

ふ
ノ
部

- ぶ 夫 にんそく 人足 今世に、夫とも人足とも云物は、古くは丁といへり。戸令に「凡男女三歳以下爲黃。十六以下爲小。廿以下爲中。其男廿一爲丁。六十一爲老。六十六爲耆。」また「凡老殘並爲次丁」と見え、賦役令に「凡正丁歲役十日云云。次丁二人同二正丁。中男云云」とある是也。さて其丁字を與煩呂と訓むは、足の臍より出たるにて、今世に人足と云と同じ心ばへの名也。和名抄に「臍曲脚中也。和名與保呂」字鏡に「靜與保呂乃須知。脚之後大筋也」と見え、書紀に「臍腫」空穂物語に「御ぐしは、よばろ過給へり」宇治拾遺物語に「よばろすちをたれなれば、にくべきやうなし」などあり。俗云、足のひつかみなり。さて仕丁と云は、書紀に「ツカヘノヨボロ」又「ツカヒヨボロ」など訓て、今世の諸家の足輕など云如く仕へ居る丁を云。次丁と云は、正丁に次グよし、殘疾等ある輕き丁也。太平記五大塔宮熊野落「われらは、夫山伏にて候

男女三歳以下爲「黃」。十六以下爲「小」。廿以下爲「中」。
其男廿一爲「丁」。六十一爲「老」。六十六爲「耆」。また「凡」
老殘並爲「次丁」。と見え、賦役令に「凡正丁歳役」
十日云云。次丁二人同二正丁中男云云とある是
也。さて其丁字を與煩呂と訓むは、足の臍より出た
るにて、今世に人足と云と同じ心ばへの名也。和名
抄に「臍曲脚中也。和名與保呂」字鏡に「靜與保呂
乃須知。脚之後大筋也」と見え、書紀に「臍腫」空
穂物語に「御ぐしは、よぼろ過給へり」宇治拾遺物
語に「よぼろすぢをたれれば、にぐべきやうな
し」などあり。俗云、足のひつかいみなり。さて仕
丁と云は、書紀に「ツカヘノヨボロ」又「ツカヒヨ
ボロ」など訓て、今世の諸家の足輕など云如く仕へ
居る丁を云。次丁と云は、正丁に次グよし、殘疾等あ
る輕き丁也。太平記五(大塔宮)「われらは夫山伏にて候

○ふいがう祭 糜籥祭也。溫故名跡志一云「十一月八日、吹革祭。鍛冶、鑄物師、餲白金細工、すべて吹革をつかふ職人、此日稻荷の神を祭る。俗にはたけと云。此夜子どもあまた鍛冶が軒にあつまり、ほたけくとはやせり。柿密柑をなげて子どもにあたふ」とあり。按に、こは今も京師にある火燒より轉じたるにや。世諺問答下云「十一月御火燒」とて、神火をたきてたてまつるは、何故に侍るにや。答、此事の體におこりとては侍らじ。たゞし神樂とて諸神の前にて云々。庭火を焼しかば云々。今も内侍所にて行はるゝ御神樂の如く侍るなり。官人庭火を燒なり。諸卿近衛のめし人など、所治の人より、のび庭火などとて、歌うたふもたよりありて覺え侍る」とあれば、本は神樂の庭火より出て、後に諸社の神

間「今昔物語、卅五條「衣櫃ハ本夫苟テ出來タリ」
○ふいがう、輔 ふいがうは、フキバハ 横の音便也。
和名抄に、輔 布岐加波所シムルオコロ 以吹治火イハシマツカヒ 令_古熾之囊也アラヤニシノカサガシ

わざの遣りしにや。さて又今の吹革祭と云は、三條宗近と云名工の傳説より祝ひならひたる歟。日次紀事、四云月「十一八日、稻荷社火燒新御供社家松本氏調進相傳。鍛工三條小鍛治宗近鑄三刀劍時。稻荷神出現而搗ニ鐵槌、助ニ鍛錬刀ニ云」とある是なり。但し神の出現といふは、俗説ならんか。神社啓蒙には、彼山の埴土燒刃に妙なるに依て、常に拜禮ながら埴土を取に、屢々往來せし由に云り。さる事と聞ゆ。

○ふうじ 封 北山抄 「封字のかはりに近代は忽引ニ墨」林葉集、五、待返事戀「ひくすみのたがひてもこばそれをだにもじならひせんしるしと思はん」夫木抄、文、前民部卿雄右「今たびは見てかへしけり手なれつゝひくすみだがふふみのうはがき」

今昔物語、廿七、十二「緋ノ紐ヲ以テ上ヲ強ク封結ニシテ」

「班固傳」設後北虜稍彊。能爲風塵方復。求爲交通。將何所及云々」これらは世の亂れたるをいへり。唐詩以下明詩などの中には、今云心なるも多し。

○ふうぶん 風聞 文選「奏彈王源。源先表婦。又以所聘餘。直納妾如其所列則與風聞符同」

○ふうみ 風味 懈耕錄八「白湛淵先生。續演雅十詩發揮云。云々。八珍殺龍鳳。此出龍鳳外。荔枝配江蛇。徒誇有風味者。謂迺北八珍也。」

○ふうりう 風流 後漢書四十三 高士傳序高士傳、十二、秋、笛吹嶺、夫木抄、十六、秋、後鳥羽院御製「さをしかのふえふくみねのおひ風にしのぶもちすり露ぞ亂る。」

- 封じ目に墨つくる「」よりを見よ。
○ふうぞく 風俗 文選、長笛賦各得其齊。
人盈所欲。皆反中和以美風俗。
○ふうぢん 風塵 後漢書二十蔡形傳云。形

○ふえふき 箫吹
と云。萬葉集十六丁三十に「歌人跡 和平召良米夜 箫吹跡」
和^{ハシ}平^{ヒサ}召^{スル}良^{ミツ}米^{イイ}夜^ヤとあり。
○ふえん 無鹽
星^{キラ}榮^{カク}經^ニ云^ヘ「良^{ミツ}無^{ナシ}鹽^{シホナツケテス}」
名^{メイ}

無鹽 盛衰記に木曾義仲無鹽の事と云し事を記せり。

○ふかしき 不可思議 維摩經、六「不可思議」

品六」維摩詰所說經「一名不可思議解脫」

○ふき 落 落をふきと云は、布々岐の略れ

る也。和名抄に「崔禹錫食經云。落。和名布々木」と

あり。

○ふきおこす 賴政卿集「くらき夜も漸ふきおこせ火を中に置て聲のみ妹を見えぬる」堀川院御時

百首、修理太夫顯季「山里にひとりぬるよは埋火も板まの風にふきおこされて」

○ふきかくる 後撰集、春上「梅の花かを、ふきかくるはるかせにこゝろをそめばひとやとがめん」

○ふきたふす 藤原爲忠朝臣集「秋かせはなにのうらみに野山なる草木をなべて吹てたふせる」

○ふきつ 不吉 後漢書六十九上孔僖傳「冬拜臨晉令崔駰以家林筮之。請爲不吉止僖曰盍辭乎」

○ふきほす 吹干 萬代集、冬、雅經「白妙のころも吹ほせこがらしのやがてしぐる、天のかぐ

山」夫木抄、十六、冬、後鳥羽院御製「神無月時雨とび分けゆくかりのつばさふきほすみねの木がら

○ふくひき 福引 運歩色葉に「正月。小兒索貫錢。有無之索不見而取之云。福引云々」

○ふくむ 合 合をふくみ、ふくむなどいふ

は、ふくみ、ふくむの訛歎。又合組の約れにてもあるべし。應神紀大御歌に「府保語茂利」萬葉集十四三十に「布敷麻留」十八十六敷布賣利廿三十に「保々麻例等」六十七に「舍而」などあり。

○ふぐり 陰囊 げひ ふりまら 和名抄に「針灸經云、陰囊俗云布久利、今案莖垂。莖者玉莖。垂者陰囊也」新猿樂記「似夏午間」恩管抄六「元久元年七月十八日に、修禪寺にて、又頬家入道をば刺殺してけり。とみにえとりつめざりければ頬に緒をつけ、ふぐりを取などして殺してけりと聞えき」陰囊をふぐりといふ事十訓抄中に家綱、行綱が事いへる條に「家綱云々。夜更て、さりけうさむきに、ふりけうふぐりを、ありけうあぶらんと云て

し」腹のふくらかなるより云なるべし。和名抄云「崔禹錫食經云。鯨鮀^{カニ}怡^ヒ和名布久。一云。布久閉。犯^{ハシム}之則怒。怒則腹脹浮^{ヒバク}出水上^{ミツル}者也」とあり。餅を布久陀と云も、ふくだむよし也。ふくと、ふくべなども、ふくだみ、ふくばるよしの名也。(ふくだの條参照)

○ふくす 服す 源氏物語、帚木に「ごくねちのふくやくをぶくし云々」中古は、くひのみする事を音にぶくすといへる事多し。神佛に、日毎に物を供するを日服といへるも中古より後の詞にみゆ。

○ふくだみ 服す 源氏物語、蓬生「かみや紙、陸奥紙などのふくだめるに」枕冊子十四段「ありつる文の結

くも御服なるべし。

○ふくだ 行宗集に「くだものといふに、もちひこそいたさやつなれみな人のふくだとのみもなづくおもへば」日高川畫詞に「ふくだやしなはせ給へ」

○ふくだみ 「ふぐ」を見よ。

○ふくだみ 源氏物語、蓬生「かみや紙、陸奥紙などのふくだめるに」枕冊子十四段「ありつる文の結

にも最後になるを、帯持といふは、古きならはしの詞の遺れる也。古事記、上卷に「故其菟^レ白^シ大穴牟遲神。此八十神者必不得^{タマハ}三八上比賣^{ミモリ}雖^{タガ}負^{タガ}帝。汝命獲^{タナ}之云々」書紀雄略卷に「根使主^{タマハ}を罪なひ給ひて其^{タマハ}が子孫を賜^{タマハ}茅渟縣主^{タマハ}爲^{タマハ}負^{タガ}囊^{タマハ}者」とあり。これ奴僕の役なりし也。西宮記、踏歌、裝束條に「又以^{タマハ}衛府官人^{タマハ}爲^{タマハ}持^{タマハ}袋^{タマハ}者^{タマハ}裝束如^{タマハ}常^{タマハ}」また禁秘御抄得選條に「行幸之時持^{タマハ}大袋^{タマハ}與^{タマハ}内侍^{タマハ}同車^{タマハ}是^{タマハ}不可然事第一也」とあり。古き時よりの習ひとして、此

ほど迄も物へ行くには其調度食料等迄、悉く袋に入て持しむるならひ物に多く見えた。和名抄に「袋之可^レ帶也。和名於比不^レ久呂」と見ゆ。此外寶帝、直宿帝、調度帝、餌帝、ひち帝、弦帝、火打帝、など猶くさぐの名ありき。さて今世に母を指ておふくろといひ、又崇めてお袋様といふなるは、いか成よしとも知がたれど、そもそも如此事をも袋を用ひし世のならひに合せて考ふるに、古へは、女主を家戸主といひ、老女を専女と稱して家の内のみかないを執り、萬の結くよりをなしつれば、其家にては則其家婦、袋の如くなるまゝに稱へそめたる詞にてあるか。かの天地を袋にぬひてといふ古言と合せてもしかおばしき也。太秦、廣隆寺、牛祭祭文に「家々の大黒天神乃袋持仁至留迄驚之言白久」

○ふくわら 「ねこだ」を見よ。

○ふご 竹器 今も農家に此名のものあり。拾玉集、二、楚忽第一膽百首、早蕨「さわらびの折にしなればしづのめがふご手にかへる野べの夕ぐれ」夫木抄、五、春野「春の野にふご手にかけて行

しづのたゞなどやらんものあはれる」
○ぶこつ 無骨 中昔の末に「骨なくといふ
詞あり。それを音語にいふ歟。大鏡三「太政大臣實頼、敦敏少將の男子佐理大貳、世の手書の上手云々。上達部、殿上人などさるべき人々あまた參りつどひてのちに、日高く待たれなりて參り給へりければ、すこし無骨おばしめされど、さりとて有べき事ならねば、書て罷出給ふに云々」但し此言は、源氏などに、こちなくといへる詞を、かく文字して填たるにやともおばしき也。されど今無骨といふ言の起りには、猶もれざるべし。

○ぶさう 無雙 後漢書廿七「丁鴻傳。時人歎曰。殿中無雙丁孝公」東漢觀記、同上後漢書七十「董香傳。京師號曰。天下無雙江夏董童」

○ふさはしからず 「ふさふ」を見よ。

○ふさふ 無雙 古事記、上「女
人先「言不^レ良」傳曰「布佐波受」と訓べし。其は八千矛神の御歌に、云々許禮波布佐波受、云々許母布佐波受、云々許斯與呂志」とありて、布佐波受は宜しの反にて、宣しからずと云なり。源氏物語などに、

人もなき山ざとの村しぐれ、ふたよりみよりおどろかすかな」

○ぶち 班 元良親王御集「あしふちと言馬

に乗給ひける比、女のもとに久しくおはせざりけれ

ば」獸の毛色のまだなるをぶちといふ。初言を濁

るは俗言故也。古くは、布を清みていへり。今も清

て云國もありといへり。神代紀に「天班馬」和名抄

に「駿馬俗云布知無萬。說文云。駿不^レ純色也」ま

た「駿馬。亦雅注云。四肢皆白。曰^レ駿。俗云、阿之

布知」とあり。

○淵は瀬となる 紀淑望古今序云「淵變作^レ瀬之聲寂々^レ閉^レ口」歌^レよの中はなにか常なるあすか川

きのふのふちはけふの瀬となる」

○ふつさり 物の多き事をふつさりとあるなど

いふ。ふさの音便なり。蜻蛉日記中「いとにぎは、

しく、里ごちして、うつくしきものども、さまくにさに引ちらし給ひてさわぐ。破子やなにやとふさに

あり」同下「むかしの世に云々。あやしささまにのみなどまどひ侍るは、長う侍らん事もいとかたし。さ

らにくきこえさせじ。今は高きみねになんのぱり侍るべきなどふさにかきたり」ふさにといふ詞、空穂物語にも多く見えたり。

○ふつゝか 源氏物語、帚木に「ふつゝかなる

うしろみまうけて云々」ふつゝかは、太つかといふ

ことにて、物の丈夫なる心なるを、何事もたをやか

にやさくしき心をこのむ世となりて、却ていやしく

げすくしき心になりたる也。萬葉集、十八「かた

思ひを馬に布都麻におはせもてこしへにやらば人か

たはんかも」源氏物語、「わがな「御^レあるむかしよりも

いみじくおもしろく、すこしふつゝかに物々しきけ

そひてきこゆ」^レボメタル方也 同、東屋「ふつゝかに書

たるもの」^レ老筆 同、朝顏「ふつゝかにこちくし」

徒然草上段「不幸にして愁にしづめる人のかしらおろ

しなど、ふつゝかにおもひとりたるにはあらず、あ

るかなきかに門さしこめて、待ともなくあかしくらしたる」

○ぶつつけ 是は打つけを訛り來れるなるべし。伊勢集「たが爲にこれるなげきをうちつけにほひもしらぬ我におふする」後撰集、五、秋上「うち

有ては、大やけのために大事いできはべりなん」
○ふばこ 文宮 伊勢物語『あさみこそ袖は

ひつらめ涙川』云々といへりければ、いといたうめで、今までまきて、ふばこにいれたりとなんいふなる云々』濱松中納言物語に「ちんのふばこのすこしおほきなるを」

○ふはつく 「ふはつく」を見よ。

○ふはく ふはりと掛る ふはつく 幕などの風を含みて靡くを、ふはくするといひ、又豆腐のふはくなどいふ、賤き詞のやうなれど古語也。古事記上卷、須世理毘賣命の歌に「阿夜加岐能、布波夜賀斯多爾牟斯夫湧麻、爾古夜賀斯多爾、多久夫湧麻、佐夜具賀斯多爾云々」此綾垣は床の隔の壁代、帷帳の類にて、其ふはくする中にといふ意なり。東鑑四、廿三「顔フワトシテ希有之仕官哉」

○ふはりとかける 「ふはり」と見よ。
○ふびん 不便 空穂物語、俊蔭下「けふは御ともにさぶらひつれば、ひたやごりなりとて、かへり給はんびんなかるべしとてたち給ふほどに」
○ふまへどころ 新撰六帖、二、信實朝臣「く

づれそふ破れついぢのいぬはしりふまへ所もなきわが身かな

○ふみづかひ 夫木抄、卅、光俊朝臣「むすびめのたがふもしらずふみづかひほかにみせずといふがはかなき」

○ふみづかる 「づかる」を見よ。
○ふみにじる 新撰字鏡下に「蹉跎失ノ勢之貌。跨也。跨也。不彌爾志留」また「蹉跎跨也。跨也。不彌爾志留」

○ふみはさみ 大鏡、二、「此史ふみはさみにはさみて、いらなくふるまひて、これおとゞにたてまつる云々」江次第抄、五、今案件見參挿文夾覽上卿云々「説文チ竹ナドニハサミテカテマツルナリ」竹取物語「一人の男ふばさみに文をはさみて」古本今昔、廿七廿二「ふばさみに文をさして目の上に捧て」今昔物語、廿五、九「忽名符ヲ書テ文差ニ差テ息状ヲ具シテ」江次第石清水臨時祭抄「隨見參到來候御前藏人插文刺奏覽畢返給」

○ふみはじめ 學問始 菊花物語、晚待里「此宮の御ふみはじめに」

○ふみはだかる 今昔物語、廿七、廿六「午ノ踏ハダカリテ不動テ立テリケレバ」

○ふみをる 踏折 夫木抄、三、春、源仲正「じめおきし我がかたをかのさわらびと先ふみをるはのべの春駒」

○ふむはなち 「おし」を見よ。

○武門十七藤 某藤氏 藤氏の、南家、北家式家、京家の四家の事は、誰もよく知れる所なればいはず。今齊藤、内藤などいふ氏の多きに就て、世俗の爲に其事をいふ。こはもと藤氏庶流より出て、世武家になれるが、其支族繁多なる故に、姓に官名を加へて稱號とせるもの也。その例は木工助に任じたるを工藤といふ。修理進に任じたるを進藤と云、齊宮介に任じたるを齊藤と云、兵衛に任じたるを衛藤と云、武者所に候したるを武藤と云、内藏助に任じ

るをモジラチウガ

某藤氏

藤氏の、南家、北家

たるを内藤といふ。主馬に任じたるを首藤と云、成るもあり近江介に任じたるを近藤と云、伊豆介に任じたるを伊藤といふ。加賀介に任じたるを加藤と云、備後介に任じたるを後藤と云、周防介に任じたるを周藤と云、遠江介に任じたるを遠藤といふ。尾張介に任じたるを尾藤と云、春宮亮に任じたるを春藤と云、安房介に任じたるを安藤と云、山城介に任じたるを山藤といふ。これを武門の十七藤といへり。
○ふゆき 冬木 夫木抄、十八、冬、仲實朝臣「おく山のならひとなればあなしけの雪よりさきに冬木こりつむ」

○ふよう 一不用 明月記、嘉祿元年十二月十日「又仰云。此不用、重逐日狂亂。近日所藏置也。不拘

制法」淮南子十二道應訓。大司馬曰。云々。以長得其用。而况特不用者乎。物孰不濟焉」

○ふりうもんじ 磨不レ立文字者。恐ニ執レ文潔相也

○ふりがみ 振髪 夫木抄、三、春、寂蓮法師「なにはがたあしのわかばのほに出てまねくとみゆるこまのふりがみ」

○ふりそで 振袖 萬葉集八に「宮人の袖つ
け衣秋萩にほひよろしき高まどのみや」同十六「結
幡之袂着衣服」などあり。今の振袖と云ものは、こ
れより出たる歟。

○ふりつゝみ 和名抄、瑟鼓。榮花物語月宴四十九「つ
いなに殿上へふりつゝみなどして參らせたれば」千
載集、物名「ふりつゝみ」續詞花集、同、未木抄、十
八、歲暮、隆季卿「九重の雲の上よりやらふなのお
とにともなふふりつゝみかな」

○ふりく

今ふらくといふ。今昔物語、甘

六、二「足ヲ離テ網ノ上ニ踊ケレバ、フリくト落
ル程ニ遙也ケリ」

○ふりまら 古枝 降々 藤原爲忠朝臣集「あらち山
梢の雪に風吹けばはる」とすれどまたはふりく

「ふぐり」を見よ。

○ふるえだ 古枝 新撰六帖、六、信實朝臣
「ふるえだのふしのみのころうつほざのたてるもさ
びしはたのやけ山」

○ふるぎ おちくば物語、一の上「子どもの古
さぬやある云々」

○ふるぎつね 「ふるだぬき」を見よ。
○ふるくひ 古代 藤原基俊家集、上「人ご
う何をたのみてみなせ川せのふるぐひくちはて
にけん」

○ふるだぬき 古狸 ふるぎつね 古狐
倉右大臣「すゝかけの苦おりざぬのふる衣おともこ
のものにきつゝなれけん」

○ふるだぬき 古狸 ふるぎつね 古狐
老功のしれものを古狸といふ。むかしも古狐といふ
事見えたり。大鏡、四「げに賀茂明神などのうけさせ奉り給へばこそは、二代まで打つゝき榮えさせ
給ふらめ。この事いとをかしうさせ給へりと世人申き。前帥殿のみぞ追従ふかき古狐かな。あなあい
けうなと申給ひける」夫木抄、廿七、雜、藤原爲顯
「花を見る庭のほとりのふるぎつねかりのいろにや
人まよふらむ」

○ふるて 古衣をふるてといひ、古衣賣家をふ
るてやといふは、則ふるたへの約れる古言也。祝詞
式に「明細布。照細布。青和幣。白和幣」とあるが如
し。

○ふるてや 古手屋 (ふるての條を見よ)

○ふるね 古根 堀川院御時百首、左京太夫
顯仲「枯たてる蓬がふるねかきわけて澤田のくろに
すみれ花さく」

○ふるひごゑ 今昔物語、十九、十一「待程ナク
振ヒ音ヲ舉テ」

○ぶるく ぶるくふるふといふことむかし
も見えたり。今昔物語、廿二「介は、いとどだに老
衰たる者の、この事をきくとひとしく、足たちかね
て、ぶるくとしけるが、やうやく目代のもとに云
々」

○ふるほどを いさよひ日記「おうちの歌のふる
ほぐどもを」

○ふるまひ 振舞 捨玉集、六「たがはすよ
うき世の人のふるまひはしごる、秋の山のはの空」

○ふるものあつかひ 源氏物語、玉かつら「む
づかしきふるものあつかひかな」

○ふれくこゆき 讀岐典侍日記、下三十六「つと
めて起出みれば、雪いみじくふりたり。今もうち、
御まへを見れば、べちにたがひたる事なき心地し

○ふれくこゆき 讀岐典侍日記、下三十六「つと
めて起出みれば、雪いみじくふりたり。今もうち、
御まへを見れば、べちにたがひたる事なき心地し

ておはしますらん有さま、ことくに思ひなされて
いたる程に、ふれくこ雪と、いはけなき御氣はひ
にて仰らるゝ聞ゆる。こはたぞ。たが子にかとおも
ふほどに、誠にさぞかし云々」

○ふろ 風呂 湯あみする事を風爐に入ると
云事も久しきこととみえたり。管見記「嘉吉元年七
月卅日甲子。霽。殘暑甚。入風爐」とあり。

○ふろしき 風呂敷 南嶺遺稿、三「風呂敷」といふ物は、もと湯あがりに敷もの故、風呂敷といふ。今の湯ぶろしきといふは重言也。室町家の時分

大湯殿を建て、近習の大名衆へ處に入給ふ事也。め
いく入たるあとにて、衣服どもぶろしきに包みて
おき、あがりては、ぶろしきを開き、其上になほり、
後に衣服を着す。是より物包むものを惣てぶろしき
といふやうになりたり。只ふくさ包といふべし。ふ
ろしき包とは、いやしき名也。右室町家の記録の説
なり」

○ふろや 風呂屋 東見記「風呂之始久
矣。清拙和尚。及一山和尚等。始來日本以還。建仁寺
風呂。掲於浴室二大字」伊勢備後守貞彌の日記
花替

三代記「春日亭風呂御成といふ事年々あり云々」案に
此ころは、風俗に、人をまねきて、燕樂する事を、風呂と稱したものなり。又東國紀行に「湯風呂、石風呂よなど、ねんごろに人をもてなす云々」なども

皆おなし。こは、湯にいれてのちに酒宴などする業よりいへるなるべし。又道路に風呂屋と稱して酒をする家いできたり。其家に女をすゑて、湯を浴る時はかたびらを貸し、酒になれば酌をとる。これを湯女といふ。此湯女つひに情をうるものとなりて、東都糀町のきのくに坂などにて、風呂屋と唱して皆娼屋、文祿の比までは所々にあり。今は深川てふ所などにも百風呂といふ娼家あり。いま其名の殘るは江戸にては是ばかりなり。

○ふんどし 今の俚言に犢鼻を、ふんどしといふは、絆を音便にいひ頗せるなるべし。絆と絆とは、その物別なれども、かのふんどしといふ物を四つにとりて股にからめる状、絆を懸るに似たるより比へたる詞とす。萬葉集、十六、「鳥爾己曾布毛太志可久禮牛爾己曾鼻繩ツクレ」とよめるをもおもふべし。此絆の事は、ほだしの部に出づ。

景一曰清一。某乃靈一弟子也。最一又曰今夏居奈良、秋初歸洛」とあり。平家を語る濫觴あきらかなり。

○へう 水の降を閉字といふは、雹の字音の轉せる詞也。雹は古くは、水雨といへり。古事記日代宮段、また遠飛鳥宮段にも、「零大水雨」と見え、天武紀の古訓に「冰零大如桃子」とあるこれなり。もしくは、水を引て氷と訛りたるも知がたし。比佐米の事は火の雨の條に委く出づ。

○べエ べそをかく べかかう しほの目どゝのめ 今小兒のべかかうといひて、醜貌、つきする事のあるは、もと古事記上、黄泉國段に、「伊那志許米岐穢」とある古語の遺風にして、其語の意を貌つきにてしらす態也。そば先たとへば、其愛する物をおこせといふに、不欲時、べといふは、否む貌也。又將泣ときの貌つきを、べそかくといふは、やがて不欲おもちを云也。文しほの目と云めつきは、醜貌にて、不欲目つきをする也。右の古語を書紀に「不須也凶汚穢」と書るにてもしらる。又とのめと云は、調目にて、欲する目つき

○へ ら 放屁 文筆 法華經、五、安樂行品、十四「尼捷子等。及造世俗文筆。讀詠外書」

八ノ部

○へ 放屁 今物語「おびたゞしくおほきなるへのおと出來にけり」同「はこのしだかりければすかしてんとおもひて」

○語平家 中御門宣胤卿記に「文龜二年二月廿九日。參一條殿云々。夜又參彌一檢校語平家之由。最一曰。昔爲長卿者作此書。十二卷留在播州。其後曰性佛者。上之於音曲而歌詠耳。性佛之後曰如一檢校者有三弟子。一曰覺一。一曰城一。々々弟子元居八坂。城元次曰城意。々々次曰城存。存尙焉。覺一弟子有四檢校。曰通一。曰靈一。曰ニ

其文は檢校の條に出しつ。臥雲日件錄「文安五年八月十九日。最一檢校來。中嶋子又問。座頭語平家之由。最一曰。昔爲長卿者作此書。十二卷留在播州。其後曰性佛者。上之於音曲而歌詠耳。性佛之後曰如一檢校者有三弟子。一曰覺一。一曰城一。々々弟子元居八坂。城元次曰城意。々々次曰城存。存尙焉。覺一弟子有四檢校。曰通一。曰靈一。曰ニ

○へえ 「はあ」を見よ。

○べかかう 今をとめ子らが、兒子をおどすとて、べかかうと云事あり。中昔のほどは、めかかうといひし也。大鏡、五、「此花山院は風流者にこそおはしましけれ云々。あてて御ゑあそばしたりしさまぞ云々。たかんなの皮を男のおよびごとに入てめかかうして、ちごをおどせば、顔あかめてゆくじうおちたるかた云々。いづれも「さぞありけんとのみあるましうこそ候ひしか」(猶「ベエ」)を参照せよ。」

○へぎ へぐ へつる 故事要訣云「物をへざとる、へぐ、へつるなど云は何事ぞ。耗字をへぐとよむ。折字をへつると讀む也。へぐも、へつるも心は同事也。日本紀に「新羅國に折」とあり」といへり。

○へす おうべすなど俗語にいへり。押付ル意

也。萬葉集、七「姫押」とよめれば、押をへしとよめる也。枕冊子十九段「さいでのおじへされて、さうしのなかに有けるをみつけたる」

○へそ　卷子　臍　ほぞ　ほぞを刺

古事記、崇神段に「以^ニ問蘇^{アシマ}紡麻^ヲ貫^ス針刺^ニ其衣襪^ヲ」云々和名抄に「楊漢語抄云。卷子問蘇今按本文未詳。但問巷所傳。續麻圓^ヲ卷名也」とある是也。

記傳云名義^ノ紡麻^ニ也。和名問と見えて、此字說文に、織縷也と注せり」といへり。今按に、織縷と注せるは、機經の糸のよしなれば、其義協はず。其卷る形の臍に似たるより云なるべし。臍は同抄に「四聲字苑云。臍臍。整齊二反。和名保曾。俗云倍曾。腹孔也」とあり。柱の切組をほそといひ、ほぞを刺などいふも、臍よりいふなるべし。

○へそかく　「ペエ」を見よ。

○へた　落書露顯序「かけたる所ありとて、へたとや申べき」袖中、二に「わろき身をばへたといふ也」古今顯注^{ヘタニ}へたとはほとりなきさ也。それによせてわろき身をもへたといへり

○下手の物好^ヲ　乳母の草紙「ものを御すき候と

申ることにより候云々。惣じて物を御すき候はい、一期御すき候へ、みやうもくに下手のものすきといふ事あり」

○籠甲のくし

新撰六帖、三、光俊朝臣「河の籠を問都比といふ事ふるし。古語せにうきたるかめのさしぐしはみし世ながらのしるしなりけり」

○へつつひ　竈を問都比といふ事ふるし。古語拾遺古本にも見え、神樂、竈殿歌、本「とよへつひみあそびすらし、久かたの天のかはらに、ことのこゑする、ひさのこゑする。末久かたのあまの川原にとよへつひすらしも、ひはの聲よし、ことのこゑする」枕冊子にも「御へつひ」とあり。〔猶「かまと」を参照せよ。〕

○へつらふ　詣は邊づらふにて、とかくに君の邊りにとりそひて、心をとらんとする形容よりいふ言也。されば邊とも、邊ばむともいへり。猶此言は五言へりぐたるの條に云を合せ考ふべし。

○へつる　「へざ」を見よ。

○へどづく　和名抄四「病類病源論云。胃氣逆則歐吐。上於后反。字亦作嘔。倍止都久又太萬比」

○へひりむし　新撰字鏡「蠟戶比利虫」

○へひる　和名抄云「屁。四聲字苑云「屁續^ノ共相通」漢語抄云「放屁和名倍比流」

○べ^ト　「ちんばう」及「ぱ^ト」を見よ。

○へみ　「くちなは」を見よ。

○部屋　落雀物語、一之下「このおちくばの力たる部やへおはせなど契りため給ふに」空穂物語祭使「くさむらのほたるをあつめ、冬は雪をつとめて、へやにつとへたること年かさなりぬ」

○へら　新撰字鏡に「鍔へら、また、鎧へら久支」

○へらす　「かなべら」を見よ。

○へらすぐち　盛衰記、五に「祐慶は少も不^ハ邊」

又六に「入道は不^ハ邊^ハ軀にて」などありて、此程は詔ふ事を凡て詔といへり。されば今へらすぐちきくといふも、不^ハ邊口にて、本は詔はず物云言なり。今日は不^ハ憚云かたより、終に恥まれ口きく方にも轉じたる也。

○へらぬさま　へりくだるに同じ、其の條を見

○へのこ　和名抄云「食療經云。食^ハ蓼及生魚^ハ」或令陰核疼。陰核俗云「扁乃古」〔猶「ちんばう」を參照せよ。〕

○へにさら　顎粉　隆信集、物名「へにさら」たび^ハにあふはうれしきけふさへにさらにもよふ我こゝろかな」。

○へのこ　和名抄云「食療經云。食^ハ蓼及生魚^ハ」或令陰核疼。陰核俗云「扁乃古」〔猶「ちんばう」を參照せよ。〕

○へりくだる 謙退するをへりくだると云は、邊下るにて、貴人の邊を下り退きて、敬ふかたより出る詞也。盛衰記、五に「祐慶は少も不邊」又六に「入道は不邊軀にて」といひ、又著聞圖畫物の中に「かゝるはおほく不邊置」いひければなどあるに合せて其意なる事しらる。又源氏物語、帝木に「馬のかみ物さだめのはかせになりて、ひゞらきぬたり」とある、此ひゞらきは邊開にて、かの中將の御物語を聞しうちに、居寄たる席を避て、更に在し事どもかたり出んとて、坐つくりひするさま也。

○へる 「める」を見よ。

○べんこう 辨口 後漢書列女 曹世叔妻傳 「夫云婦德不必才明絕異也。婦言不必辨口利辭也」

女誠婦行篇同之。

○返事 かへりごと 答するを返事するといふは、かへり言より轉れる也。則かへりごと、いへるは、古語の遺れるもの也。中古後答歌を返しと云は、賀茂翁のいへるごとく、なかくに俗びたるいひざま也。古事記傳十三丁二「不復奏」の釋云「かへり言とは、使人の還て申言と云意にて、かへり

は其使に係る言なり。然るに今京になりて後、答歌を返しと云から、かへり言をも彼方の答言の意と思ふは違へり。漢文に復命と云復は、かの返しと云に當れり。かへり言のかへりには當らず。中昔の物語文などに、かへり言を、只かへりとのみ云、又御かへりと御を添て云るなどは、是らは後に轉りて、かへじとかへりと一になれるなり」といへるは、却てわろし。こは、座、去、來の類と同じく、自らにも他にもいひて、古くはこなたよりのかへしも、かなたよりのかへりも、相與にかへり言といへるを、後に返しとは變轉せしなるをや。

○へんつき 篇續 枕冊子四段 「さしつどひて、へんをそつぐ」築花物語月華「ごすぐろくうたせへんをつかせ、いしなどりをせさせて」

○へんく草 菊の花の實になりたるを、あづまの俗へんく草といふ。是は其實三角にて、三絃の撥のかたちしたるゆゑなるべし。越中國射水郡の人云「わが國の兒女は、すぐりに撥草といふ。又實にならぬ已前をば胡麻菜といふ」といへり。

○べんり 便利 前漢書九十八元后傳「太后知

其爲莽求璽。怒罵之曰。汝屬父子宗族蒙漢家力。富貴累世既無以報受人孤寄乘便利時奪取其國不復顧恩義。後漢書七十上杜篤傳「地勢便利介胄剽悍可與守近利以攻遠」

ほノ部

○棒 竪の棒 橫の棒 世俗の字畫を論す

るに、一を竪の棒、一を横の棒と云。此等は文字の事なれば、其音を以て唱ふべき也。譬へば一は居月反、說文には衝月反、ノは普折反、右戾也。今は甫勿反、左戾也。一一爲於十、ノし成三人字」と云類、こればかりの事は、纔かなる字書の凡例中にも出たる事也。

○ほうか 奉加 知識 奉加とは神佛へする寄附施入をば、諸人の力をかりて加へ奉るといふ意也。其例は神事に射するを奉射といひ、ねさ奉るを奉幣と申すが如し。むかしは此奉加の事を、知識と云き。是も知音の交友にちなみて此勸進す、奉加させしゆゑなり。俗に頼母しと云物の心ばへなり。知識の事は國史より以下諸國に多く出たり。奉加と

云は、古へは聞えず。中古以後の事也。寶物集、五「尾張國に後綱聖人とて行業やむ事なき聖ありけり。一國これに歸し、ほとんど他國の歸依に及び、知識をすゝむる事ありて、熱田の大宮司が許へ行て奉加せよといひけるに、聖人中間に推入て奉加をせめければ大宮司醉の紛れに腹を立て、水を沃て追出したつ

いでに知識の事をはゞ、續日本紀十七天平勝寶五年夏五月戊寅。上野國碓氷郡人。外從七位下。生江臣安人多。伊與國宇和郡人。外大初位下。凡眞鑑足等。各獻當國分寺知識物。並授外從五位下同。閏五月癸丑云々各獻當國國分寺知識物。並授外從五位下などの多智有識の人を云もあり。知音の人を云もある事はなべて心得る事なれば、こには省けり。

○ほうける 字治拾遺、一二丁「ばくちうちのうちほうけてゐたるが云々」ほゝけを音便にはうと

いへるにて、ふゝけと音通ひばげたる也。

○はうてふ　庖丁　田子　和名抄云「庖丁魚鳥」者謂之庖丁。俗云倉厨也。莊子養生主篇、庖丁牛を解事を詳に書り。丁よく庖厨の事を

知り、宰烹する故に、庖丁といふ也。さて今俗に小刀など云て、刃物を云は、もと此庖丁の用ふが轉れりして、田子が荷ふ桶を直に田子といふ類也。

○ほこもち　「ほうもつ」を見よ。

○ほこもつ　ほうもち　さしあげ　差上

ほうちつは捧物をいへり。古事記、朝倉宮殿に「爾其一言主大神手打受」其捧物と見ゆ。これは神佛貴人などに物を献るには、木の枝に附て捧て献りけるより、其物をも捧物とはいひし也。是より後の物語書には、ほうもちと字音にも多くいへり。但中古に云るは、皆佛事の時に、佛に奉る物の名なり。

今も寺のはうもつとおばえたるが如し。これたまゝ、佛事に古き名の残れる也。又俗語に差上と云も此捧と云しことの餘波の残れるなり。建禮門院右京太夫集、上四十「内裏にて御八かうおこなはれし五ぐわんの日云々。中宮の御ほうもちは、二枝を宮のすけ

しげ權亮もれなどもたれたりしとおぼゆ」

○ばうれいわた　江戸にて、古綿打直して、中入綿となしたるをばうれい綿と云は、ばろ入綿の約

めて音便に云へる也。ばろとは、萬葉集、十九、二十「天雲乎富呂爾美安多之鳴神も云々」又八、六十「庭裳保抒呂爾雪ぞふりける」などあるも、和名抄に「沫雪其弱如水沫」といへる如く、雪の駄の脆く柔弱にして崩れ安きを云と一つなり。

○棒をくらふな　此諺禪錄より出たり。臨濟錄云、「如今更思不得」一頓棒喫セントナタク又云「喫吾三十棒了也」又云「喫鐵棒有日」無門關云「來無門處。喫三痛棒」正宗贊云「洞山三頓棒合喫。不_レ合_レ喫」

○ほか　外　萬葉集十一丁「荒磯こえ外ゆく浪のほか心」

○ほかす　落葉物語に「ほかし給ふ」とあり。今物を棄るを、ほかすといふは此ほかすの略語也。

○ほかひ　行器　行器也。難波鑑四云「八朔云々。建長の比より祝ひ來れると也。始めは田の實とて、土器に米を入れて、人のもとへ送けるとかや云

はれに思ひけり云々」蜻蛉日記「兼家長うた」「あひも見て、かゝらぬ人に、かゝれかしなにのいはきの、身ならねば、おもふ心もいさめぬに」源氏物語、東屋「人のけしきはしるきものなれば、見もてゆくましる云々」按に萬葉集、五、七丁憶良長歌「字既具都遠奴伎都流其等久布美奴伎提由久智布比等波伊波紀欲利奈利提志比等迦云々」これも無情人と云なり。

(猶いはき)を參照せよ。)

○ほくせき　木石　いは木　むすめもいは　木ならねばなどもいひ、又情なくむげに物しらぬを木石のことなど音語にもいへり。遊仙窟「心非木石豈忘深恩」白氏文集「人非木石皆有情。不如不遇傾城色」文選、鮑昭行路難詩「心非木石豈無感」徒然草(上)「人木石にあらねば、時にとりて物に感する事なきにあらず」伊勢物語云「むかしをとこ有けり。女をとかくいふ事、月日經にけり。いは木にしあらねば、心ぐるしとやおもひけん、やう／＼あ

○ほくせきにおとる　萬葉集、五丁「うけ沓をぬきつる如くふみぬきてゆくちふ人は伊波紀欲利奈利提志比等迦汝が名のらさね」

○ほくそ　新撰六帖、一、衣笠内大臣、うちにだす火うちの石のはくそなみなに、もつかぬ我身なりけり」(猶「ひうちぶくろ」を參照せよ。)

○ほくそづきん　「やまとかづきん」を見よ。

○ほぐみ　穂組　新撰六帖、二、信實朝臣「秋のたのかりほのほぐみいたづらにつみあまるまでに

ぎはひにける」夫木抄、十二、秋、正三位知家卿「露そむるわさだのほぐみうちとけてかりほの床にいや

はねらるゝ

○ほくり 木屐

日本略記「延喜中京都長者

皆著木屐。婦女始嫁。至作漆畫五采爲糸此服妖也」

後漢書十三「五行志一木屐」

○ほくろ はくろ 麻 黑子

和名抄

三「瘡類部。鼈唐韻云。鼈音孕、和名於毛波々久曾面黑子也」

黒子。漢書云。黒子_{和名波々久曾今中國呼麌子}。麌音於草反。吳楚俗

謂之誌者訛也。今案に、鼈は鼈字の誤なるべし。字書を考るに「鼈形定切。面上黒子也。又與暈同。佛書

說。天女顏色端妙。無諸野鼈。卽暈暈二字」と有。又

麌は「乙減切黒痕也。又人名春秋晉麌麌又於檢切面有黒子也」とも注せり。此字後漢書六十七黃昌傳に

「昌左足心有黒子也」とある是也。かくて右和名抄の訓に、波々久曾とある曾は、魯の誤にて、はくろなるべし。後の物ながら愚管抄に、七星のはくろとするせり。今俗にはくろと云もはくろの略語也。愚管抄、卷三、崇德院御所戦の條に宇治左府頼長の射られし所云「筑後の前司しげさだと云し武士は土佐源太しげさねが子也。入道して八十に成しに逢て侍りしかば我射て候ひし矢の、まさしく中り申て

候らひしとて、腕をかき出して、七星のはくろのかく候て、弓矢の冥加一度も不覺候はずとぞ申候」

こは腕に七星の母黒の有しを云。古人にも多かり。

朱子の面に七星の黒子ありといふが類び也。

○ほころる 萬葉集、五十九「我をおきて人はあらじとほころへど」

○ほころび 落窓物語、一の下「几帳のほころびより臥ながら見たまへば云々」

「秋風にはくろびぬらし藤ばかまつりさせてふきりくすなく」

○ほさき 「くさだ」を見よ。

○ほざく るなか詞にものを細やかに云事をほざくといへり。神代紀に「時中臣遠祖天兒屋命則以神祝祝之云々」祝詞に「神祝稱辭竟奉」などあり。こは壽壽よしなれども、懇切に云かたより轉れるなるべし。

○ほしいひ 干飯 築花物語、玉臺「又干飯などいふものをめしいで、いけほり、木ともひくも

のにたまふ

○ほしづくよ 星月夜 今昔物語、廿七、五

「翁和ラ立返テ行クヲ、星月夜ニ見遣ケレバ」堀川

百首、常陸「われひとりかまくら山を越行ば星月夜

こそうれしかりけれ」千首歌類、爲尹「池の面にう

かぶ笠の星月夜」

○ほしをいたいく 詞花、能宣「年をへて星をいたいく黒かみの人よりしもになりにけるかな」

○ほぞ 「へそ」を見よ。

○ほぞけ 「むかびつくる」を見よ。

○ほぞち 保曾知 热瓜 今世に、柿の實にへたくされとも、ほぞちとも云あり。古へ瓜のよく熟せるにいへり。古事記、日代宮段に「倭建御子

云々。即如熟瓜振拆而殺也」和名抄に「熟瓜。和名保曾知。或説。極熟蒂落之義也」とあり。是柿に

云も其心ばへ同じくて、甚く熟ておのづから蒂より絶て落たる由の名なり。和名抄に「対和名保曾、今按対ト蒂ト相通」とあり。實は本曾知字理と云べきを、字理をば省き云は、既に體語になれる故に、此例常に多し。齊宮式に「七月節九月亦同云々。官人以下

料。熱瓜一百顆」大膳式に「七月廿五日節料熱瓜

已上四顆五位已上二顆内膳式に「供奉雜菜熟瓜八顆六月」清慎

公集に「女御實子に、ほぞちを長櫃に入て置せ給へ

るを夕立のすれば、御格子おろしたるまぎれにうせ

ければ「ぬす人はほぞちを見ても雨ふればほし瓜と

てや取隠すらん」古今著聞集に『曉行法印』人の許

へまかりけるに、瓜を取り出たりけるがわろくなり

て、水じみたりければよめる「山城のほぞちと人や思ふらん水くみたるは瓠なりけり』此外瓜の事、も

のにいと多く見ゆ。今にも蒂の落るまで取らず置た

らましかば、其味ひも類ひなからましや。又藝能の堪たる人をいふことあるは、極熟練したる方也。又

上毛桐生の邊にて、物の理りの一わたりには聞えたれど、未よく底解のせぬ事をほぞおちせずといふは

臍落のよしなるべし。

○ほそめ うたながめ 夫木抄、十三、秋、信實朝臣「月の夜のこゑもほそめに憲あけて心をやれるうたながめかな」夫木抄、卅一、雜、同、夫木抄、十八、冬、藤原保俊朝臣「天の戸をほぞめにあけてみそなはす庭火のかげのおもしろきかな」

○ほどをさす 「へそ」を見よ。

○ほそる 藤原爲忠朝臣集「かたいとのよりよ
り君をせとるみはおもひほそりてあふべくもなし」

○はだ そだ 新撰字鏡云「燐火餘木也。保
太久比」とあれば、はだは、火朶の義なるべし。し
もとをそだと云も、楚朶と聞ゆれば也。さては字音
のやうなれど、適しかるなるべし。

○はだ 梢

萬代集、三、源顯國朝臣「大ひ
ゑやほだくしづがあさ衣うらやましくもねれぬ袖
かな」新撰六帖、くぬぎ、信實「里人のはだかる冬
のふしくぬきおほかはのべのあれまくもうし」

○ばだいのたね 夫木抄、廿、雜、僧正靜觀「と
しをへていたくなめでそ花の山ばかりのたねとなら
ぬものゆゑ」萬代、雜、三「花のさかりに僧正遍昭
がもとに遣しける、靜觀僧正「年をへていたくなわ
びそ花の山菩提のたねとなぬ物ゆゑ」

○はたかす 大和物語に、ふつるとあるも、捨
るにて同語か。可考

○ほだき 藤原爲忠朝臣集「袖さむき田中のも
りの辻社ほだきをはやす聲きほふ也」

○ほだされて 伊勢物語に「此男にはだされて
とてなんなきける」

○ほだし 萬葉集、長歌に「馬にこそ、ふもた
しかくれ、牛にこそ、はな繩はぐれ云々」此歌にふ
もたしとよめるは、蹈もだしの意にて、馬のにげ放
れるやうに足にまとひてふみもたさしむるを云。

此ふもの約めはなれば、ほだしとも云。和名抄云「絆
名云。絆半也。物使平行不_レ得_二自縦_一也。和名保太
之」古今集、雜「世のうきめ見えぬ山ちへいらんに
はおもふ人こそほだしなりけれ」又「あはれてふこ
とこううたて世中をおもひはなれぬほだしなりけれ」
伊勢物語に「此男にはだされてとてなんなきけ
る云々」源氏物語其外にもあまた見えたり。今も罪
人の足手にかくるをほどあしともいひ、又妻子には
だされてなどいふも、かの絆半に譬へて、それに引
かゝりてといふ也。

○ほたもち 牡丹餅にて、小豆をくはへて、其
つかねたる形容を、牡丹の花のにぎはしきに見立た
る名也。又是をおはざともいふは、其色あひ萩の花
に見立たるならん。強飯を「尾花色のこはいひ」と

いへる類ひ也。(猶「おの部おはぎ」をも參照すべ
し。)

○螢ばかりの光りだになし 竹取物語「かぐや
ひめひかりやあると見ればはたるばかりの光りだに
なし」

○はたるひ 蜂火 藤原爲忠朝臣集十二「さは水
にうつれるほしと蜂火といづれわけえぬ玉とみてけ
り」櫻井基佐集十一澤邊蜂「みだれぬる澤邊のかたの
はたる火に道もまよはずゆきせるなり」同十二「や
む事なき人のもとにて蜂を「よもすがらいねぬるね
やのともしひにつみおく也はたる火のかげ」また
旅宿蜂「うきたびのやどりの床のともし火にかけあ
きらけくみゆる蜂火」和泉式部集二「はたる火はこ
の下草もくらからずさ月のやみは名のみなりけ
り」

○はつく 発句

萬葉集、八五十「和人作_ニ此

發句「袋草紙、八雲御抄などにも發句の事見ゆ。文

體明辨、十四云「其詩一二名_ニ起聯_ニ又名_ニ發句_ニ」吾

妻問答に「爲相卿の母阿佛と云人、吾妻へくだりけ
るに、長月晦日に或人連歌をつかうまつるとて、阿

い。十六の御ほとぎ也」
又加萬_ニまた「廾彌加保止支」また「卷益_ニ益保止
支」築花物語、とりべの「とりつきうめてほとぎに
みえざらん」此方に下紐をときて待意也と諸説いへ

○ほどあし 帆筒 和名抄云「絆半也。釋名云。絆_{ハシ}
保太之也」
缶名。新撰字鏡に「瓶_{ハシ}也。保止支

半也。物使平行不得_二自縦_一也」
いる。十六の御ほとぎ也」
ひもとくの約_ニ萬葉集、四「いめに
だにみえんとわれはほどけれどもあひしもはねばうべ

り。本居氏は「保杼毛友は、保邪毛友にて、祝神代紀か」といへり。空穂物語「けづりさを、わたしていろ／＼の御ぞども色をつくとときをとき」盛衰記冊一、御門大納言成親卿「むすびてし心のふかきもとゆびに契りし末のほどけもやせん」續古今釋教、教家「うしともおもひほどけば夢の世をいとふは人のさめぬ也けり」

○ほとけ 佛 後漢書廿二楚王英傳「注袁宏漢記。浮屠佛也。西域天竺國有佛道焉。佛者漢言覺也。」

○佛の顔も三度 將以覺悟群生也云々。佛長丈六尺。黃金色。頂中佩日月光。變化無方。無所不入。而大濟群生云々

○ほとぶ 伊勢物語に「皆人かれいひのうへに涙おとして、ほとびにけり」史記云「膠液船解」

○ほどろ 方丈記「わらびのほどろをしきつかなみをしきて夜の床とす」

○ほなみ 穂並 新古今集、秋上、前太政大臣「かせわたる山田の庵をもる月やはなみにむすぶ水なるらん」

○ほねさり ほねしやり 空穂物語、俊蔭「あなるらん」

が佛の御ゆかりには、はね舍利のなかよりもあまさちぶさはいできなん」

○ほねとかは さへ人をこひをればさこそは骨とかはとなるらん」文集新樂府、陰山道「飛龍但印骨與皮」

○ほねをり 折骨 後漢書、五十三、李固傳「昔昌邑之立。昏亂日滋。霍光憂愧。發憤悔之折骨」

○ほねをへる 新撰六帖、しほり、光俊「山ふかくまことの道にいるときはわが身しをりとほねをへる哉」同「さりともとさせる事なきつぶれ笠ほねをへり」伊勢物語、知顯抄「たりしちからをつくし、ほねをへりたるかひもなく」夫木抄、冊二、雜、信實朝臣「さりとてもさせる事なきやぶれがさほねをへりてぞ君につかへし」

○ほの字のりの字 堀川院を申す。讀岐日記「ほのじりもじの事、おもひ出たるなめりと仰らるゝは、をりてぞ君につかへし」

○ほの字のりの字 堀川院を申す。讀岐日記「ほのじりもじの事、おもひ出たるなめりと仰らるゝは、をりてぞ君につかへし」

○ほゝかぶり 頬蒙 太平記、廿三、十六「

度ニサツト馬ヨリオリホ、カブリハヅシ、笠ヌギカヘ地ニツケテゾ畏マリケル」これは今的手拭と云ものしてかぶれるにはあるべからねど、詞の同じければ、例に出せる也。盛衰記、冊四「我着タリケル薄墨染ノ衣ノ、脛高ナルヲ脱テ、打懸タリ。三位是ヲ罕ニ著ヲ頬冠シ給タリケレバ、衣短ウシテ脣マハリ過ズ」

○ほゝづき 酸漿をほゝづきと云は、頬春の意なるべし。兒女の口に啞て鳴すさま、頬中にて春が如くせれば也。書紀、神代卷に「赤酸醬」とあるは古名にて、和名抄には「酸漿。和名保々豆木」とあり。榮花物語、初花卷、寛弘五年の所に「宮上東はうへのみつばねにおはします云々。たゞいまの御年はたばかりにこそおはしませど、いとわかうぞお

堀河院の御事とよく心えさせ給へるとおもふも、うつくしうて」鳥羽院五歳の時の事也

○ほふじ 法事 拈遺物語、衾「朱雀院の御事などし給ふにも」

「復言汝等已發道意。有法樂。可以自娛。不應復樂五欲樂也。天女即問。何謂法樂。答云。樂常信佛。樂欲聽法。樂供養衆。樂離五欲云々」

○ほゝ 「つら」及「ばゝ」を見よ。

○ばゝ 煩々 ほゝ 頬 べゝ 倍々 人の面の頬を保々と云は、左右含まりたる處なる故に云。萬葉集廿三丁に「古乃豆加之波能。保々麻例等」とある是なり。これを含むともよめるは、同十四三十に「由豆流波乃布敷麻留等伎爾」十八十六に「佐具良波奈伊麻太敷布賣利」又應神紀の歌に「府保語茂理」ともあるを、契冲云「含隱なり。神代紀に、含字をふゝむと點せり。布を保と通へり。つばめるほどをいふ」とあり。今按に、女の陰を今煩々と云。古語には保等といへり。保等は含處の上略にて、煩々

はしますめり。さらに猶いとこゝろもとなきまでさやかせ給へり云々。御色しろくうるはしうほ、づきなどをふきふくらめてするたらんやうにぞ見えさせ給ふ云々」源氏、野分卷に、玉かづらのさまをいへる所に「ほ、づきとかいふめるやうに、ふくらかにて、髪のかゝれるひまくうつくしうおぼゆ云々」枕草子異本に「おほきにてよきもの、ほ、づき」名義は頬衝のことなるや。ふきならすとは、兩頬をつきしめてならせば也。新撰字鏡に「連翹阿波久佐形似保々豆支質」

○ほやのつまのかひ 土佐日記、正月十三日の條に「ほやのつまのいすし、すしあはびをぞ、心にもあらぬはぎにかけて見せける」とあるはやく此語の意を考へて、山彦冊子にも出し置つる。此比きけば、今も土佐國、又越前の海邊などに、ほやのつまのがひといふ諺ありといへり。ほやは和名抄に「老海鼠。和名保夜。貽貝。一名黒貝。和名伊加比」とありて、此物の形容は、五雜俎に「海鼠。一名海男子其狀如二男子勢。淡菜之對也。貝一名」閨中海錯錄云「殼菜誰謂之東海婦人耶。當謂西施不潔」疏

云「殼菜。一名淡菜。形似殊母。一頭尖中衡少毛。號東海夫人」とあるは貽貝形の女陰に似たる故也。

和漢古今同じ諺あるもをかし。

○ほゆる 新撰字鏡「吠犬乃保由留」とあり。

今世の賤き者の言に、兒女子の泣をほゆるといふは犬より出たる歟。萬葉集、二三丁「敵見有虎可叫吼登」

○ほる 「もる」を見よ。

○ほる、人にほる、などいふは、くづほる、老ばるなどいふはると同言にして、正氣を失ひてほけくとなるを云。悦字を書も大分妨げなく當りたり。文選に「魂悅々以失度」とある、古訓に悦々をホレボレとよみたり。李善が註云「悦々失意也」

落穂物語、一の下「頬杖をつきて、忙てゐたるを、少將出づとて見給ひて云々」

○ほれ 忠峯集三丁「鳥ならばあたりの木々にかくれてほれたる聲になましものを」

○ほれる 空穗物語、藤原の君、四十一「たちはきにの給ふ、われかくやもめにてあれば、ほれぐしきを女人もとめしめんとするに」

○ほろ 七卷、對馬守小野朝臣春風起請の中に「軍旅之儀。雷在介胄。介胄雖薄。助以保佑。望請。縫造調布保佑衣千領。以備不虞」とあり、こは萬葉集十九四丁に「天雲乎富呂爾ふみあたし鳴神も」とよめる如く、彼調布にて造れる狀の、和らかにほろゝけたるより名となれる也。綿を保呂綿とも云を合せて知べし。

○ほろ ほうれいわた、ほろをさげるの類なり。古衣の破れはらゝきたるを、ほろといふは、鳥のほろ羽。又綿の崩るゝを、ほろ綿といひ、又こばれ安き物を、ほろくこばるゝといふが如く、衣の古くなりて、ほろくこばるゝよりいふ名也。ほうれいわだの條を見合すべし。

○ほろく よあるも雷神の極て盛にて、雲を踏ちらすよしのつけなるが如し。此類の語の事、所々にことわれば略して云也。

○ほろく 空穗物語「おとゝ涙をほろく」とおとして「たびづともてるかれいひほろくとなみだぞおつるみやこおへば」二條大貳集『たかりにきすのうちなきてとびたちしみしあはれにこそ「みかり野にとびたつきすほろくとなくくわれもこひしとぞみる』

○ほろく 「こもそ」を見よ。

○ほろくと涙こばす 新撰六帖、「衣笠内大臣「秋されば野に鳴きじのほろくと涙こばるゝゆふまぐれかな」

○ほろくなく 空穗物説、只こそ「おとゝな

みだをほろく」とおとし給ひて、あはれさばさやおもひつる云々」同「あやしうものたまふかな。なに事か侍らんと聞えて、なみだをほろくとこばしてたちね」

○ほろくうつ 藤原爲忠朝臣集「さす鳴春の大のをみわたせばさわらびあさりほろくうつ也」

のづからはづれおつるを保呂羽といふ。日本紀私記に「鳥の腋下毛羽也」といへるはたがへり。そは今世の言に、こばれ安き物を、ほろくこばるゝはらくはつるゝなどいふと、同言なるもて知べし。萬葉集、十九に、「天雲乎富呂爾布美安多之鳴神も」

○はろをさげる　　ぼうれいわたの條の如し。但しわたりの据にさがりたるを云のみにはあらず。其衣の破れごばれてさがるをも云也。それも既にはろの條にいへり。

○ほん　　本　　書籍を指て本といふ事、和漢、古今の通稱常語なり。さて、しか常語になれて、われも人もいかなるよしにて本といふぞと問ふ時、一座誰もしらぬ事ありき。今按に、先文選魏都賦注曰「一人持本。一人讀書。如怨家相對也」又石林燕語云「唐以前皆寫本。未有摸印之法。人以藏書爲貢。雖不很多。而藏者精神對。故往々有善本。學者以傳錄之難。故誦讀亦精詳也」とあり。是にて其義明か也。校正精寫の書を本據として寫し取りし故に、本とは稱し初しなり。印板の行はれざる以前の稱なれば古き事なり。

○ほん　　孟蘭盆也。日本書紀、廿六「齊明天皇三年秋七月辛丑。作須彌山像於飛鳥寺西。且設孟蘭盆會」とある、是孟蘭盆會の國史に見えたる始なり。又皇和通曆をもて、干支を推すに、辛丑は七月十五日になたれり。さて孟蘭盆と云ふことは

孟蘭盆經と云に出て、目連母の得脱せし故事也。事長ければ今略之。常に七月十五日を盆といふは、此孟蘭盆の略也。蜻蛉日記上に「はになどするほどになりけり。見ればあやしきさまに、になひいたゞきさまくにいそぎつゝ」ほん人をほにといふ類也。

○ほんくわい　　本意　　後漢書卅四、張敏傳「臣伏見。孔子垂經典皇陶造法律。原其本意。皆欲禁民爲非也」

○ほんけ　　本家　　空穂物語、藤原の君「いと陸士衡「區々本懷實有可悲」

○ほんだけ　　本懐　　文選、謝平原内史表「おほくたてたるよろづが中にあたりて、おもしろきを本けの御料につくらせ給ふ」

○ほんだな　　益棚　　空穂物語、春日詣「本妻どもみなわすれ侍りて、ことそうし給へば」
○ほんとう　　本朝　　漢家　　和漢といひ、皇朝、本朝、漢家と云事も據なきにはあらず。前漢書今日至十六日。人家設棚々各位之牌。修孟蘭盆會云々」

○ほんにん　　たうにん　　本人　　當人　　世俗に云本人は其人にて、是を當人ともいふ。雅語に云本つ人は、昔の人なり。又前方の人を云。又今云本人の事を、中昔の物語等には、佐宇士美といへり。商坊には家々の戸外に燈籠を燃す。或は工を盡していろいろの作物をこしらへ、人の見ものとす」と見る。是を見れば、六月晦日より七月中燈籠を燃す事は、近年の事と見えたり。江戸吉原の燈籠の事は正徳年中玉菊と云が追善より起りたるよし、北女閨起原に委く見えたり。人の善く知れる事なれば記さず。

○ほんとうろう　　益燈籠　　東鏡、十四「文治六年七月十五日丁卯。今日孟蘭盆之間。一品參勝長壽院一給。被勸修萬燈會。是爲照平氏滅亡衆等黃

七十五 李尋傳「陛下親求賢士。無彊所惡。以崇社稷尊賛本朝」後漢書六十八蔡倫傳「元初四年帝以經傳之文多不正定。乃選通儒謁者劉珍。及博士良史。詔東觀各贊授漢家法。令倫監典其事」注、劉攽曰「按諸儒各謂其師說爲家法。後人不知妄加一漢字」同上四「和帝紀朕且佐助聽政。外有大國賢王。並爲番屏。內有公卿大夫。統理本朝。恭已受成」呂覽六、季夏紀音律「蕤賓之月。陽氣在土安壯養俠。本朝不靜草本早槁」文撰冊魏公九錫文潘元茂「昔者董卓初興國難。群后釋位以謀王室。君則攝進首啓戎行。此君之忠於本朝也」淮南子十繆稱訓「晉文得之乎閨内。失之乎境外。齊桓失之乎閨内。而得之乎本朝」注「閨内亂而朝廷治也」今案に、此淮南子の本朝は少しく異なる意あり。朝廷をさしてすなはち本朝といひて、其さす所せばし。これもいひもてゆけば、同じ事にて、たとへば物語書に、此國をわが朝廷といひ、異國をひとのみかどもいへれば、いづれにもつかふべきことわり也。

○ほんとうろう　　益燈籠　　東鏡、十四「文治六年七月十五日丁卯。今日孟蘭盆之間。一品參勝長壽院一給。被勸修萬燈會。是爲照平氏滅亡衆等黃

身」空穗宮段に「然其正身所以不參向云々」宮記、日代宮段に「此化三白猪者。非其神之使者。當其神之正身」とあり。また、若櫻宮段に「滅其正身」空穗宮段に「然其正身所以不參向云々」宮

衛令に「凡兵衛衛士上番。皆須檢點正身。然後奏上」續日本紀五に「見其正身准式」冊に「名簿雖編一本貫。正身不得入市」萬葉集、十六に「正身不來。徒贈裏物」などの類いと多し。但其云る

中には、俗に身體と云意なるもあり。故實字をも多く用り。景行紀に「實則神人」孝德紀に「驗僧尼云々之實」などあるが如し。其つゝきに因て分べき也。

○ばんのうくのう 煩惱苦惱 清少納言、枕草子云「ともなるをのこわらはなど、おのゝえもなく

ちぬべきなめりと、むづかしがれば、ながやかにうちながめて、みそかにとおもひていふらめど、あな

わびし、ばんなくなうかな。いまは夜中にはなりぬらむなどいひたる」とあり。これそのころのことをわざなるべし。

増鏡云「ばんなくなうくびにのる。さかづきは花にのるとはやして、法皇の御

むかひにまゐる」とあり。これ其ころのことをわざなるべし。

○ばんのくば 一項の窪みたる所をばんのくばといふは、くばみの窪といふ言の上略歟。そは頸といふは、人の身體の中にして、くびれたる所故に、名となれるなるべし、さらば、くびれたるは、くばみ

にて、又其くばみの中のくばみたる所のよしにやらん。續世繼に、うなじのくばみといへる、此ばんのくばの事と聞ゆ。

○ばんのこ うなし 和名抄云「項陸詞云。

項胡譜和名字奈之。頸後也」とあり。此頸後の窪む所をば、俗にばんのくばと云は、頸の窪の義。其窪む所を宇奈之と云は、畝筋の意也。左右に畝筋たちて其中くばめば也。

○本來面目 傳燈錄云「道明求法六祖。六祖曰。那个是明上坐本來面目」

まノ部

○まいす 賣子 今世の言にまいすとも、まいすものともいへるは賣子の吳音にて、もと佛家よりいひならはしたる言也。下學集、上賣子商僧也

と注せり。按に、佛道に身をよする者は、凡惱を除去利欲名聞を先離れて、道を修すべきを却て佛を賣、法をあきなひて、不淨說法をつとむる濫行の僧を指て、賣子とはいひしよし也。

○まかせる 金葉集、賀、高階明賴「なはしろ